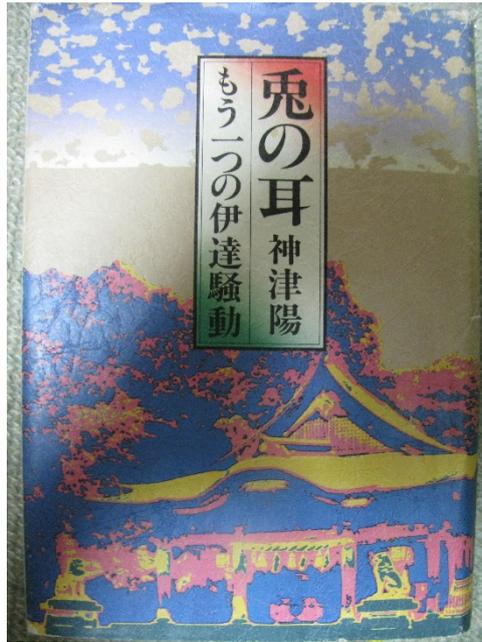


山家(やんべ)清兵衛殺害の謎

<< 作成日時 : 2014/01/03 18:45 >>

2014年1月2日



日本一の石造り大鳥居

私は愛媛県宇和島市の生まれであるが、子供時代和霊神社大鳥居を見るにつ

け、「大きな鳥居だなあ」と思っていたことを思い起こした。

というのも、同郷の作家神津陽さんが書いた畢生の書『兎の耳—もう一つの伊達騒動』(1987年 創風社刊)という本を読んで、その大鳥居が、石造りとしては「日本一」と書いてあったからである。

出雲大社や伊勢神宮ならともかく、四国の辺境ともいべき人口 10 万の宇和島市(かつて評論家大宅壮一は、宇和島を四国の終着駅と言った)にある鳥居が日本で一番大きいということを、実はこの本で初めて知ったのであった。

そうしてまた、宇和島人なら誰一人として知らないものはない山家(やんべ)清兵衛という江戸初期の宇和島藩の家老の名と、その人物の巷に語り伝えられた悲惨な最期を親兄弟から聞かされたことのない者もない。

この歴史上の人物はそれほど有名なのである。

秀宗の付け家老山家清兵衛

宇和島藩の初代藩主となった伊達秀宗は、仙台六二万石伊達政宗の長子である。この人は正室の子ではなく側室の子(庶子)であったために、仙台藩主となることは出来なかった。徳川幕府による勢力分散の意図も在って、長子秀宗は元和元年(1615)仙台から一二〇〇キロも離れた辺境の地四国の宇和島に太守として赴任することになったのである。

このドキュメントの主人公山家(やんべ)清兵衛は、秀宗付の総奉行として政宗から特認され共に宇和島にやって来た。

私は高校卒業と同時に宇和島を離れることになるが(その後、度々帰省)、先に述べた清兵衛の最後、和霊神社は清兵衛を祭神として祀った神社であることは親

その他から何度も聞かされていたし、神社で遊んで由緒書きなども見た記憶がある。

清兵衛暗殺の謎

おどろおどろしいことに、清兵衛は、藩で敵対するもう一人の家老職桜田玄蕃（げんば）一味に深夜襲われ、寝ているところを吊り落とされた蚊帳のまま斬殺され、蚊帳で簀巻きにされて井戸に投げ込まれたと伝えられている。少なくとも、私たちはそう聞かされた。

善玉山家清兵衛、悪玉桜田玄蕃という構図が出来上がり、領民の巷説として定着した。

しかし、と著者はいう。一族郎党十数人が十人規模の刺客によって斬殺されるという大事件にも拘らず、藩でそのことが問題にされ襲撃の首謀者とされる玄蕃方に何のお咎めがないのは何故か？殺された清兵衛が何故和霊として祭り上げられたのか？と。

当然のことながら、狭い藩内でそうした重大事件が起きれば藩庁で問題になり、しかるべき決着がなされるべきなのに、そうした形跡はどこにも見当たらない。それは何故か？

という反問からこの刺激に満ちたドキュメントは開始される。

最上級のミステリー

著者は、（本人は歴史研究者でも郷土史家でもない一介の素人であると断りながらも）、あたうる限りの資料を駆使して、その謎を解明してゆくのである。

私自身がその土地で生まれ育ったゆえに興味がいや増すという特殊事情を差し

引いても、その展開は文学として最上級のミステリーに値すると私は確信する。

一度に答えを出して見せるのではなく、一つ一つ論理的に理に適った説明と展開、それに資料を小出しにしてその読み説きを緻密に行いながら、少しずつ実態を炙り出してゆく手法に私の興味と期待はぴたりと吸い寄せられる、見事な展開なのである。

一般的には、在所の神社というのは古事記に記される天上の神々が祭神となるのであるが、恨みを呑んで死んだ人々を祀り上げて出来た神社は少ないわけではない。

古くは聖徳太子とその一族を祀った法隆寺、菅原道真を祀った天満宮、平の将門を祀った神田明神など、世に知られた例は数限りない。日本人の固有の血というべきか、恨みを呑んで誅殺された人たちの怨霊への恐れは根深いものがあった。

宇和島藩の資料は抹殺

和霊祭神に祭り上げられた山家清兵衛もその一人である。誅殺というからには時の権力者が関わっているとしなければならない。

結論から述べると、清兵衛の時の権力者というのは藩主伊達秀宗その人でしかありえない。清兵衛一家(婦女子は除かれる)とその一族郎党が皆殺しに遭ったのは、藩主秀宗の上意による殺戮であった。

単なる派閥争いの結果なら、当事者が処罰を受けないということとはあり得ない。

著者は資料を漁りながら、実父政宗がわざわざ附け家老として宇和島に同行させた山家清兵衛を、子の秀宗がどういう経緯があって上意討ちしたかを推察して

ゆく。

しかしながら、肝心なところになると資料は抹消され、隠匿され、表には出て来ない仕組みになっている。

宇和島伊達家に関する資料ではすべてが謎であったところに、仙台伊達四代藩主綱村が宇和島伊達二代藩主宗利に当てた書簡の存在が明るみに出た。

納得のいかない清兵衛暗殺

そこには宇和島藩祖秀宗の素行が記してあり、秀宗のことを「奢侈淫楽」「粗暴乱行」と述べている。著者はそこに目を付けた。

何事にも謹厳実直な清兵衛が、秀宗の度を越えた生活の乱れを憂い、事ある毎に諫めることに我慢できず、ついに事に及んだのではないかとするのである。

清兵衛を殺害したとされる悪玉の代表桜田玄蕃は、清兵衛殺害事件には直接的には関与していない、と著者はほぼ断定している。

深夜突然清兵衛宅を刺客が取り囲み、一族郎党10数人を殺害して引き上げるという、前代未聞の大事件に住民たちは気付いており、その後の経過で主君の上意討ちであるということが、囁かれるようになったことは必定である。

しかしながら、民意に沿った藩政を行って領民に慕われた清兵衛が、上意討ちとはいえなぜかくも無残に殺害されなければならなかったか、納得がいかないものであったに違いない。

清兵衛の怨霊の祟り

藩主に対する人民の怨嗟の声は水面下で広く囁かれるようになった。

何よりも決定的であったのは、事件の後、秀宗の子供たちがことごとく若死にし、悪玉として流布された桜田玄蕃を初め近臣たちが相次いで不審な死を遂げる、という出来事が続いた。

無実の罪で惨殺された清兵衛の怨霊による祟りである、と秀宗や近臣たちが考えたのは無理もない。

霊を慰めるために、最初は一家臣の手で小さな祠が建てられただけであったが、その噂はたちまち領民の間に広がり、相次いで参拝者が訪れるようになったので、二代宗利の時に山家清兵衛を主神とする神社が建立された。

殿様が家来を祀るというのは前代未聞のことであり、何かと物議を醸したであろうが、そんなことを気にしている場合ではなく、藩の祭神として清兵衛は神様となったのである。

とはいえ、「奢侈淫楽」で「素行乱行」の藩主が、気に食わないからといって品行方正な家老を一族郎党共に皆殺しにしてしまうというまさに乱行の極みは、決して表に出てはならないことであった。

伊達政宗の大芝居

しかし、報告を受けた父伊達政宗は激怒し、秀宗に勘当を言い渡し、宇和島藩の改易まで幕閣に願い出たという。

いかなる理由があれ、事前に知らせもせず自らが信頼する付け家老を誅殺するという息子の暴挙に、政宗は驚きかつ激怒して正義を愛する太守を演じたのである。

たとえ、地方の一中藩といえども、君主の乱行による藩政の乱れは幕府の重大関心事であり、場合によっては取り潰しにまで発展することが少なくなかったので

ある。まだ体制が十分に固まっていなかった徳川幕府は、些細な理由で藩を取り潰し改易を頻繁に行った。

現に老中土井利勝、大目付柳生宗矩は関心を抱いていた。そうしたことを十分に承知している政宗は、先手を打って早々と改易を申し出、親の責任であることを縷々述べ立てることによって、結局は幕閣側から慰められる形となり改易を免れた。

このことは本書では触れられていないが、百戦錬磨の大藩の君主政宗であるからこそ可能であった收拾劇であったと私は考えている。

善玉清兵衛&悪玉玄蕃

そうした大向きのこととは別に、宇和島では関係者はもとより、真実を知っている領民も殿様のことについては表立っては触れず、また記録等も故意に事件を抹消した。

あくまで、悪玉桜田玄蕃が政的である善玉山家清兵衛を強襲して殺した、ということになっており、清兵衛に同情した殿様が、その霊を慰めるために和霊神社を建立した、という茶番の筋書きが出来上がったというわけである。

その筋書きは江戸時代を通してだけでなく、現代にも受け継がれており、我々が子供の頃聞かされて育ったということについては、冒頭部分で述べておいた。

丸の内和霊神社は自宅に比較的近い遊びの空間であり、子供の頃、神社の境内で喧嘩ゴマをして遊んだ思い出がある。ただし、晴天の日でも境内は暗い籠った陰気が漂っていたように思う。

一族郎党が惨殺された山家宅跡地に建てられた神社であるということは、うすうすとはみんな知っていたが、陰気の正体にまで気持ちが及ぶことはなかった。



生々朗々として建つ和霊神社

須賀川の川縁にある本来の和霊神社は、本殿にたどり着くまでに石段を何十段も登らなければならず、宏大な境内を持つ堂々としたその社殿は、生々朗々と四周を威圧している。

私はこの本で、生まれ故郷の歴史について多くのことを学んだ。

和霊神社は先の戦争で全焼し間もなく再建されたと聞く。私の大先輩である宇和島出身の緒賀喜代子さん(89歳)が、この書物を貸してくださったのである。

緒賀さんの御祖父は新しい神社の再建に設計、建築方として担当されたとのことである。生まれ故郷をよく知る機会を与えて下さった緒賀さんと著者神津さんにお礼を言いたい。

『ホルネット』の競演

<< 作成日時 : 2014/01/26 16:04 >>

ブログ気持玉 0 / トラックバック 0 / コメント 1

2014年1月25日



持ち運びが簡単なホルネット

去る11日、新春恒例となった森ギャラリー主催のライブが荻窪「かふえ&ほ
ーる with 游」で行われた。

詩即興朗唱は佐土原台介、ホルネットは金子雄生さん。

毎年音のパートナーが変わる。前はジャズドラマーの中村達也さんであっ
た。中村さんの迫真のドラム演奏は、聴いている私の身体が震えるほどであっ
たが、今回の金子さんのホルネットは、ジワリと魂に沁み込むような演奏であっ
た。

彼は元々はトランペット奏者であるが、持ち運びの際トランペットはケースに入れなくてはならないが、コルネットは折りたたんでそのままリュックに納まるので、次第にコルネット演奏が多くなっていった、と語っていた。

楽器の特異不得意もそうした事情で変わっていくこともあるのだと妙に感心したものである。

巻き藁の辿る道

この新春ライブでは刀術が入ってくる。

第一部、文武両道塾実戦刀法の演武、第二部は、金子さんと私のソロの後、二人の競演によるデュオで締めくくる、という構成になっている。

第一部の演武では、実戦刀法を旨とする刀道の型を示しておいて、型に従って試斬台に立てた巻藁を斬るのである。

観ている人たちは、試斬台と巻藁の存在に対してたいした関心を持たないのが普通だ。別に特別関心を持ってもらう必要はないのであるが、会場へ運び込まれるまでの巻藁の運命について少し述べておきたい。

必要な分の莫蔭(畳表)を巻いて三か所をビニール紐で止め、巻藁の形を作る。

40本の巻藁を作るのに約二時間ほど掛かる。それをドラム缶に入れて水を入れる。

ドラム缶から溢れるほど水を入れておいても、ほぼ一日で藁が水を吸収して半分ほどに減ってしまう。二日後にまた現場に来て水を満たし当日を待つ。当日はさすがに水はほとんど減っていないが、莫蔭のアクが出て水は濃い褐

色に濁っている。そこにまた水を足してアク水を追い出し澄んだ水にさせなければならぬ。

一週間がかりのそうした作業を経て、藁を水から出して何本かまとめてビニールシートで梱包し、車で会場に運ぶ、という過程を経て試斬台に立てた巻藁がそこにあるという具合である。

人手と時間を費やして作った巻藁を仇やおろそかには出来ないのであるが、モノは仕上がってしまうと作成までの経過は無と帰し、単に奉仕するだけの存在と化してしまう。

苦勞して作った自分たちでも、勞苦の過程を忘れてしまい、そこにあるモノとしてぞんざいに扱いがちなのである。





実戦刀法の実演

巻藁作成に文言を取られてしまったが、巻藁の名誉のために一言記した次第

である。

さて、第一部の刀術では、刀道という剣法が、敵の攻撃を躲すと同時に相手に斬り込む「後の先」を徹底する剣術であることを解説をしながら、門下生三人と共に試斬してみせた。

本来剣術というのはすべからく実戦刀法であり、斬撃してくる敵の刀を避けて（刀道でいう体転して）、即座にこちらの攻撃に移る動作が必須である。現在居合道と共に刀術で最も流行っている抜刀道は、目の前の敵（藁）を見据えてその場に固着したままただ斬るだけなのである。

藁は動く敵とみなしてこちらの動作をしないと実戦刀法にはならない。そういう実演をしてみせた。



アルコールが足りない！

10分間の休憩の後に第二部。冒頭は、金子さんのソロ演奏。

アフリカで使われているボロンという楽器をまず演奏。一抱えもある大きな円

形のひょうたんに竿がついてそこに弦が張っており、爪弾くと潤いのある優しい音が響いてくる。

日本のひょうたんは胴がくびれているが、アフリカのひょうたんは真ん丸だそうである。しかも大きい。

ひとしきり優しく味わいのある音を響かせた後に、コルネット演奏が始まる。トランペットを少し小型にしたような形をしており、小回りに利く鋭い音が出る。30分ばかりで終了。

次は私の詩即興朗唱。お客から題を出してもらいその幾つかをテーマにして即興詩を組み立てながら朗唱するといういつものスタイルである。

お客からは、大気汚染、富士山その他幾つか言葉があり、テーマがまとまったと思ったのであるが、朗唱しているうちに自分でも何を言っているか分からない瞬間が何度かあり、まとまりのない即興となってしまった。

終了と同時に、酒量が足りないのだということに気付き、ビールとワインを交互に喉に流し込み、ひたすらに脳髓が痺れる瞬間を待った。

第二部の、トリとなる金子コルネットとの競演では、ソロの時と見違えるほどに喉の声の通りが良く、逡巡することも錯綜することもなく、自ら良しと頷ける朗唱が出来たと確信している。

この日は珍しくカミサンが会場に客として姿を見せており、基本的に録音しない私の即興朗唱を録音したという。



人間の運命

記憶を辿りつつ内容を再現してみよう。

「人間は進化の歴史を辿り、地球を制する高等動物になった。
しかし、人間が進化したと、また高等動物になったとってよのだろうか？
自分のテーマの即興ということになると、どうしても人間とは何か、その運命
はどうなるのか、ということになってしまいます。」

というのが、即興朗唱を始める前の前置きである。

「計り知れない大宇宙が広がっている。
その大宇宙の中で我々の太陽系が属する銀河星雲は、
何千億個とある星雲の一つに過ぎず、
その片隅に位置する太陽系のさらに一部分の地球は、
大気に漂う一個のちりに等しい存在である。

だが、ロケットで打ち上げられた人工衛星から眺める地球は、
宝石のように美しく輝くブルーに彩られている。

輝く地球の表面を拡大してゆくと、茶褐色の大地と青い海が見え、

さらに拡大してゆくと都市や樹木が見える。

そこまでは、静謐を湛えた惑星の尊厳に満ちた姿がある。

おお、生きとし生ける者たちの住処であり、誇るべき美しさと尊厳に彩られた

奇跡の惑星地球よ！

さらに拡大された地表に、ようやくその存在を明らかにする我々人類は、

本当に地球を美しいと思い尊重しているのでしょうか？

我々人類は、進化と称する文明を持つことによって、自分たちだけの繁栄を

図り、

他の生き物を圧迫する邪悪な存在と化しているのではなからうか？

60億もの人間がひしめき合い、

地表を剥ぎ取るようにして他の生き物たちを虐殺し圧迫し追い詰め、

それどころか、

人間同士でのべつ幕なしに殺し合いを演じて、

お互いに憎しみを募らせている。

人間の独善主義のために、

他の動物も植物も昆虫も、

人間に抗議の悲鳴一つ上げることなく、

次々と種を滅びさせている。

人間の個々の心の中には、

美を思い、
生命に賛歌を捧げ、
隣人同士を励まし合って生きようとする
崇高な感情がある。

一方で、他を貶め、憎み、他の生き物を虫けらのごとく扱い、
抹殺をためらうことのない心の持ち主が同居している。
それは他人同士ではない。同じ人間が共有している！

人間以外の生きものは、
他の種族を絶滅させて生きようとする意志を持たない。

青く宝石のように輝く地球の内側は血の色に染められている。

人間の叡智は欲望とセツトとして組み込まれている。
もっと快適に、もっと豊かに生きようとするほど、
地球の内側の血の色は濃くなってゆく。

雨露をしのぐ場所があり、
三食を口にすることが出来るだけで十分に幸せであるはずなのに、
欲望という意志と本能がある故に、
人間は地球にとって過剰な存在と化す。

かくいう私も左の眼は、
偏見を無くし権力や欲望に恬淡であろうとしながら、
右の眼は権力欲と欲望にぎらついている。

大宇宙の片隅で、青く宝石のごとく輝く地球よ。

少なくともその色が、血の色に変わることのなからんことを……」

創美流華道新年互禮会

<< 作成日時 : 2014/01/26 20:50 >>

2014年1月26日



酒を我慢しての宴席

すでに一週間が経過してしまった。

去る12日の日曜日、わが文武両道塾は、創美流華道新年互禮会で刀道四方祓いを行うよう要請された。

名誉あることである。場所は文京区のホテル椿山荘十階フリースタイルの間。

十時からの開宴。創美流華道の互禮会は、会員たちの表彰から始まって、各資格の授与、渡邊家遠祖源融像に対する献茶・献花、来賓挨拶、家元の挨拶と進み、12時に開宴という手順である。

当然お酒が出るが、私たちの演武は宴会終了間際ということなので、いつものように盃に頻りに手が出せない。



開宴までの二時間は初めは長く感じられたが、定例の儀式の進行に次第に慣れ、たくさんの中学・高校の女生徒たちのよく訓練された動きに引き込まれるまでになった。

こうした若い人たちが、我が国固有の伝統文化に親しみ、大人になって後進を指導してゆくようになるのかと思うと、日本の未来を悲観する必要はないと思った。







錚々たる来賓の方々

私は家元に連れられて来賓の方々に紹介されたが、何とこの日に限って名刺を

持ってくるのを忘れ、大恥をかく仕儀と相成った。(翌日、名刺を頂いた方々すべてに、非礼を詫びる手紙に名刺を同封して送った。)

来賓に日光東照宮権ノ禰宜や日光輪王寺要職のお坊さんが見えており、家元が毎年行っておられる輪王寺での献華の儀に際して、刀道演武を取り入れてくれるよう頼んでくれた。

国会議員の方も秘書を代理に数名出席しておられ、参議院議員で自民党政調副会長の中川雅治氏は、自身が担当した「秘密保護法」の必要性を強調しておられた。

宴会の開始に先だって、私が乾杯の音頭を取り、料理が運ばれてくるとともに雅楽の演奏、日本舞踊が披露され、最後に私たちの出番となった。





刀道四方祓い

まず、四方祓いから執り行う。

刀による四方祓いというのは、築城、出陣に際して、四週に潜む邪鬼悪鬼を祓い、城の無事な完成・戦勝等を願う厳正な儀式である。

古武道剣術各流派によって施行に違いがある。我が刀道も様式が厳格に定められていて、結界を造りその内側で独特の祓い方をする。

用いる刀は初(何も斬っていない鍛刀したばかりの初な状態)でなければならぬが、私にそういう刀があるわけではないので、いつも試斬に使っている愛刀を使わ

させてもらった。

まず、刀を押し頂いて腰に差し、立膝になって印を結びながら、臨(りん)、兵(ぴょう)、闘(とう)、者(しゃ)、皆(かい)、陣(じん)、列(れつ)、在(ざい)、前(ぜん)、と九字を唱える。戦いを前にして唱えるこの九字は、梵語に由来し奈良時代にはすでに使用されていた。

唱え終わると立ち上がって鬼門である艮(うしとら 東北)の方角へ歩み寄り、抜刀して中断に構え、七本斬り返す。

次に対角線を通り、坤(ひつじさる 西南)の裏鬼門に向かい、五本斬り返す。

次に乾(いぬい 西北)に向かい三本斬り返す。

そして、巽(たつみ 東南)に向かい、光明を迎えんと八相に構え、「光」と刀で書く。

最後に中央に戻り、残る邪の仮標(試斬台に立てた藁)に向かい、十字斬り(袈裟でも可)をする。

すべてを清らかにし、私たちに公平な光と幸せを与えてください、と祈る厳正な儀式が四方祓いである。







明治の元勳山形公の旧庭園

儀式をとどこおりなく済ませ、門下を加えた試斬に移った。

この日の門下は二人だけだったので、藁が余り、その処理をどうするか考えていたが、宴の参列者から有志を募って試し斬りをしてもらうことにした。

藁は少し細くして巻いてあり、十分に水に漬けておいたので、刀を斜めに落とすだけで両断できる。面白いように切れるので、我も我もと志願者が相次ぎ、着物姿のうら若き女性までも参加する盛況ぶりであった。

藁が真っ二つになるたびに歓声が上がり、場は大いに盛り上がった。

処理に困っていた藁もつかい尽くし、藁を車で運んできたK君と共に心底ほっとした次第である。

散会后、敷地内の庭園を皆で散策した。椿山荘というのは明治の元勳山形有朋公の邸宅があった場所であり、後に建築会社の藤田組が手に入れ、今は結婚式場とホテルになっている。

昔日の風情は残されており、庭には滝あり、椎の巨木あり、羅漢像があり、古い三十の塔まである。まるで、大大名の上屋敷の庭園である。散策を楽しんだ後解散。

私はK君の車に便乗して新宿駅まで送ってもらい、帰途に就いた。連日のイベントは本当に疲れる。

この度、靖国神社拝殿及び能楽堂において奉納演武を行うことが決まり、ここに報告致します。

81回目になる創美流華道家元献挿華展に合わせて、拝殿に於いて刀道四方祓いを、能楽堂に於いて試斬演武を行います。

参拝を兼ねてぜひご覧いただきたいと思います。

場所 靖国神社拝殿及び能楽堂

時間 拝殿四方祓い午前十一時より五分程度 能楽堂は、十三時と十四時の二回公演。

拝殿四方祓い及び献華の儀をご覧になりたい方は、玉串料千円を収めていただきます。

当日、あらかじめの申し込みが必要です。能楽堂については見物自由。。

出演 刀道・文武両道塾長 佐土原台介(全日本刀道連盟 教士七段)

刀道・文武両道塾生 木下 信也(全日本刀道連盟 三段)

刀道・文武両道塾生 高梨 良二(全日本刀道連盟 三段)

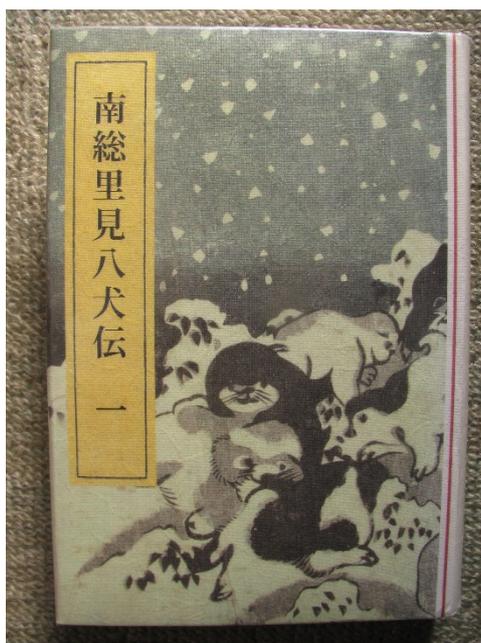
刀道・文武両道塾生 後藤 佑介(全日本刀道連盟 三段)

交通 中央・総武線各駅停車「市ヶ谷駅」「飯田橋駅」から各徒歩十分
東西線・半蔵門線・都営新宿線「九段下駅」から徒歩五分

東西線・都営大江戸線・有楽町線「飯田橋駅」から徒歩十分

南北線・有楽町線・都営新宿線「市ヶ谷駅」から徒歩十分

2014年2月9日



小説についての無知

余りにも有名なこの伝奇小説については、映画、演劇、劇画などで耳目に触れることが今でも多い。

一昨年も知人がこの小説の名を関した演劇に出演するというので、友人と連れ立って観に行った。

この小説に対する私の知識は、犬の一字が付いた八犬士が、それぞれ「仁義礼智信孝悌忠」の名が浮かび上がった珠を所有しており、その靈力に頼りながら大活躍をする、といった程度なのである。

観た演劇は、筋書きが大胆に省略され簡略化されていて、それ以上の知識を得

ることは出来なかった。

これほど有名な古典文学なのに、内容についての知識がほとんどないということに焦りと憤りを感じ、ついに全巻読破を思い立ったのである。

大容量の大著に驚く

江戸時代の作品なので原文でも大筋読めるであろうと考え、図書館で探し目録を見て驚いた。

何と、一巻平均470頁12巻の大著作なのである！

原本に近い和綴じ本が高井戸図書館に在り、手に取って見せてもらったが、ほとんど漢字ばかりの原文のすべてに作者によってカタカナでルビが付されている。

また漢字以外の文章もすべてカタカナであり、眺めてだけで眩暈を起しそうだったので、現在発刊されている文学大系などから探して届けていただいたのが、この12巻本である(『新潮日本古典集成 別巻』)。

昨年(2019年)の二月十一日から読み始めたので(第一巻の表紙を撮影した日)、全巻読破を終了したのは、今年(2020年)の二月十一日である。きっかり一年かかったことになる。

その間、この本ばかり読んでいたわけではなく、常に何冊か並行して読んでいたのであるが、原文の叙述のスタイルに慣れ、すらすらと読めるようになったのは6巻ほど読み進んだ辺りからである。

私のために全巻買って頂いた？

この集成本は行間に余裕があり、漢字以外の文章はひらがなに直してあるので幾分読み易い。

それでも幾度も挫折しそうになり、図書館から借りたまま返却期限を大幅に過ぎ

て返しに行ったことも度々ある。

しかし心地良かったのは、杉並区立柿木図書館が平成16年に全巻買い入れているのにも関わらず、誰もひもといいた形跡が無かったことである！

それは、ページに挟み込んである紐の葉(しおり)の状態ではっきりと分かる。つまり、まるで私のために買ってもらったごとく全巻新品状態なのである。そうであるからには何があっても全巻読破してやる、という強い意志に掻き立てられて当然というものである。

巻末に載せられた校訂者(濱田啓介氏)の解説によって、この本と著者曲亭馬琴の関わり等が詳しく述べられており、随分と参考になった。

この大容量小説の粗筋を述べる前に、著者馬琴が尋常ならざる読書家であり、我が国だけではなく、漢籍に広く詳しく通じているということを述べておきたい。

作者の博覧強記に驚嘆

我が国古典の古事記、日本書紀、源氏物語、平家物語、源平盛衰記、太平記、徒然草、太平記はもとより、漢籍の春秋左氏伝、論語、老子、莊子、仏教經典、史記、漢書、後漢書は自家薬籠中であり、西遊記、三国志、水滸伝は全文ほとんど暗記しているかと思われるほど活用している。

博覧強記ここに極まれり、の感がある。

また中国の古代神話にも通暁している節があり(そのことに関して、校訂者もインターネットの解説も触れていない発見があったので、後に紹介する)、作者の意気込みが異様な熱風となって伝わってくるのを防ぎえない。

この作品が「伝奇」小説と言われる所以は、妖怪、怪物、超自然現象が多出する『西遊記』に想を得ているからだと思われる。八犬士などの豪傑の登場は『水滸

伝』由来であろう。

敵将の首を啜えて帰った八房

物語そのものは室町末期から戦国時代にまたがる期間に設定されている。

物語の主人公の一人里見義実(よしざね)が、嘉吉元年(1441年)に行われた結城合戦(関東諸軍と公方家との争い)に敗れ、安房(あわ)に落ち延びるところから物語が始まる。

この合戦は実際にあったことであり、後に安房領主となる里見義実も実在の人物である。史実と虚構が入り混じっており、虚構の場合には人物名などが明らかに作り物と思わせる作りになっている。

合戦に敗れ安房に潜り込んだ義実は、その巧みな知力と謀略によって安房一国を窺う武将となる。

しかし、強力な敵が現れ城を落とされそうな情勢になったとき、飼っていた八房(はちふさ)という犬に向かって、「お前がもし敵将の首を取ってきてくれたら、娘の伏姫を嫁にくれてやっても良い」と愚痴ともつかぬ呟きを漏らす。

すると翌朝、驚いたことに八房が敵将の首を啜えて城に戻ってきたのである。義実は驚きかつ喜んで、褒美として八房に好みの物を何でも食べさせようとするが、八房は全く口にしない。次第に衰弱してゆくその身体で、伏姫の居室界隈をうろつくようになる。

忠犬八房と伏姫の結婚

その意味を悟った義実は、自らの呟きがとんでもない結末を迎えようとしているこ

とに愕然とする。

しかしそこは武士の一言、例え相手が犬畜生であろうと自ら口にした約束を破ることは出来ない。

意を決して伏姫にありのままを告げる。姫は父の苦渋を察し、八房と夫婦になることを決断する。

犬と姫は安房一国を手中にした城主義実を始め、家中全員の見送りを受けて共に暮らすことになる富山に向かって旅立つのである。

旅の途中あるぼろ屋で、役行者の化身である乞食僧から、数珠となった百八つの珠を受け取る。

人跡未踏の谷を渡り崖を越え、姫と八房は山の中腹にある洞穴にたどり着き、そこで共に暮らすようになる。

ただし、姫は決して八房に身体を許すことはしない。八房も敢えて姫を求めようとしない。

八房は谷川で魚を捕り、キノコや木の実を啜ってきて姫に与える。姫は洞窟に籠って読経三昧の日を送る。

割腹した姫の腹から八つの珠

そうして数年が経った頃、義実の家臣金碗(かなまり)大助が鉄砲を担ぎ、谷川を渡り崖をよじ登って、姫の様子を窺いに洞窟に近付いてくる。

その日、たまたま洞窟の外で仲良く寄り添う姫と八房の姿を目にして、金碗は思わず逆上して二発の鉄砲玉を放つ。

一発は八房にもう一発は姫に命中してしまう。姫は解任しており膨らんだ腹をしていた。

しかし、それは八房と交わった結果ではなく、親密に暮らす獣の精が身体に乗り移り、いわゆる処女懐胎したものであった。

姫は、無実を明らかにするために瀕死ながらも懐剣で自らの腹を裂いて見せる。

その瞬間、閃光と共に腹中から八個の珠が飛び散り飛散する。

金碗は誤って姫を殺めたことにより即座に出家を決意し、飛散した珠の行方を探し求める行脚の旅に出る。これが八犬士誕生にまつわる前史となる。

古代中国神話と酷似

さて、ここで語られる奇譚の一つ、主人の眩きを解して敵将の首を啜えてきて、主人の言葉通り姫と夫婦になる犬の話は、実は古代中国の神話にほぼ同じ話が伝えられていることを、私はたまたま読んでいた書物で知った。

1994年に青土社から刊行された『中国の神話伝説』(袁珂著、鈴木博訳)がそれである。

粗筋の紹介から少し話が逸れるが、重要な発見なので経緯を少し述べさせていただく。天地開闢(かいびやく)にまつわる話である。長いがその個所を引用してみよう。

「伝承によると、むかし、高辛王のころ(周時代)、ある年、王后が突然耳の病気になる、いろいろ治療を試みたが、効果がないまま三年たち、ある日、耳の中から黄金虫が一匹飛び出してきた。形は蚕に似ているが、長さは三寸ほどもあった。その虫が飛び出すや、たちまち耳の痛みはなくなった。

王后が不思議に思い、縦割りにした瓢(ひさご)にその虫を入れ、盤子(ばんす)で蓋をすると、なんと竜犬に化した。全身が錦のように彩られ、五色の斑(ぶち)におおわれ、燦然と光を放っていた。盤子と瓢の中で変身したので、「盤瓢(ばんこ)」と名づけた。高辛王が接見すると、非常に喜び、いつもついてまわり、一步も離れなかった。

高辛王の眩きに盤瓢反応

そのころ、房王が反乱を起こしたので、高辛王は国の存亡を案じて群臣に向かって、『房王の首を取ってきたら、娘と結婚させる』と言ったが、群臣は房王の兵力が強大で、とても勝つことができないと考え、誰も危険を冒そうとしなかった。

その日のうちに、突然、宮廷から盤瓢の姿が見えなくなったが、どこへ行ったのか誰もわからなかった。何日も探し回ったがみつからないので、高辛王は非常に奇妙に思った。

一方、盤瓢は宮廷から出るや、まっすぐ房王の陣中に走っていき、房王をみかけると頭や尾を振ってじゃれついた。房王はそれを目にするや、非常にうれしがり、左右に控える部下に『高辛王はすぐに亡びるだろう。この犬さえ見限ってわたしのもとに投じてきた。どうやら、わたしが天下を握ることになるようだ』と言った。こうして松明を煌々と燃やし、太鼓や鐘を打ち鳴らし、宴会を催して、幸先よい前兆を祝った。

盤瓢敵将の首を啜えて帰る

その夜、すっかり喜んだ房王が酒に酔いつぶれ、陣中の帳のなかで眠りこけると、盤瓢はその機に乗じて房王の首をかみ切り、口にくわえて風のように走り、高

辛王の王宮に戻った。

高辛王は愛犬が敵の首をくわえて戻ってきたのを目にして、望外の喜びを感じ、上等の肉をたくさん持ってこさせた。意外にも、盤瓢は鼻先で肉の匂いをちょっとかいただけで離れ、部屋の隅でぐったりと眠り込んだ。ものも食べず、身動きもせず、高辛王が呼んでも起き上がらぬまま、数日たった。

高辛王はとてもつらくなり、ちょっと考え、盤瓢に言った。『盤瓢よ、なぜものも食べず、呼んでも起きないのか。おそらく娘を妻にしようと思い、わたしが約束を守らないのを恨んでいるのだろう。約束を守らないわけではないのだ。』

…(中略)…

盤瓢は王女と結婚する。結婚したのち、盤瓢は妻を連れて南山に入り、人跡未踏の岩山に住みついた。

中国南部のヤオ族、ミャオ族、リー族のあいだに、この話と大同小異のものが流布しており、『盤瓢』はなまって『盤古』になっている。」(101～103頁)

この盤古こそ古代中国の天地開闢(かいびやく)の主人公であり、我が国の伊弉諾尊(いざなぎのみこと)と同じ位置にある。

長い引用になってしまったが、先に述べた伏姫と八房の物語の原型であることが明白である。ただ違うところは、中国版では夫婦としての交わりを行い、子を設けることである。

犬士を求めての、大の旅

先を続けよう。金碗大助は、大(ちゅだい)と名乗って行脚僧となり、珠の出処

を求めて関東一円津々浦々まで訪ね歩く。

噂の出処を求め出会いを重ねて珠の持ち主と次々と会合を果たしてゆく。

珠は、生まれてすぐ口から飛び出して来たり、親から渡されたり、どこからか転がり込んで来たり、まちまちである。

その持ち主はすべて姓に犬という一字が付いており、体のどこかに牡丹の形をした痣がある。

犬士一人一人の出生の由来、経歴が丹念に記され、そのすべてが武術に優れ学問に秀でている。

それぞれほぼ一巻を費やして武勇伝が語られる。彼らの親戚縁者先祖は、すべて里見家との繋がりがあり、奇しき縁を経て出会いを重ね、里見家の臣として仕えることを誓い合う。

ある犬士は闘牛に出場する筋骨逞しい巨大な牛の角を両手で握ってひねり倒し、別の犬士は人間に化けた化け猫を退治し、他の犬士は400百年にわたって人間に化けて生きる妖狐を倒し、もう一人の犬士は、時の室町将軍が見守る御前試合で、無敵を誇る猛者たちを次々に打ち破って見せる。

犬江新兵衛の登場

一番年の若い(何と9歳)犬士は、絵から抜け出てきて荒れ狂う虎を射殺し、一躍京(みやこ)の有名人となる。

また、その少年犬士は、伏姫と八房ゆかりの洞窟で幼少時を暮らし、神となった伏姫から学問と武勇を授けられ、すでに大人顔負けの知恵と武勇と学問を身に備えた神童(くしわらわ)となって人々の前に姿を現すのである。

彼の名を、犬江新兵衛仁(まさし)という。信の字が浮かび出た球を持っており、

瀕死の重傷を負っても珠を首筋に当てるだけで、たちまち元気を回復する。

それどころか、伏姫神から授けられた霊薬を所持しており、その薬を付けないしは服用させると、一旦死んだ人間でもたちまち蘇るのである。

八犬士紹介

ここで、犬士の姓名と所持する珠を紹介しよう。

犬飼現八(仁)、犬川壮介(義)、犬村大角(礼)、犬坂毛野(智)、犬江新兵衛(信)、犬塚信乃(忠)、犬山道節(孝)、犬田小文吾(悌)。以上の八人である。

八犬士が集う頃には、里見義実は仁政を布いて安房一国と上総(かずさ)の一部を領有する大名に成り上がり、今や老侯として引退しており、子の義成が当主となり、その子の義通はすくすくと育って健在である。

関東には、扇谷(おおぎがやつ)定正と山内憲定の二人の管領が派を競い合っていたが、安房の里見氏の勢力伸長に脅威を感じ、足利成氏を誘って三家揃って連合し里見を撃つことになり、大軍勢を終結させる。

不可能を可能にさせる馬琴の想像力

里見と管領家の大戦争が勃発する。この戦争は史実ではないが、戦の様子はほぼ二巻に渡って微に入り細をうがって叙述され、読者を堪能させてくれる。

馬琴の想像力は大きく膨らみこそすれ萎むということがない。あり得ない、不可能と思われることを次々に実現させてゆくのである。

「そんなことあるはずないだろう」と思った方が負けである。

この世の中に不可能なことはない、どんな奇想天外なことも現実になりうるの

だと、馬琴はおおらかに宣言しているのである。夢を見給え。夢は一つの現実であり、その人間の奇想天外な生の証しなのである。

神仙と化した八犬士

管領方の兵力は兵船を含めて約十万、里見勢は三万という本来は勝負にもならない兵力である。

しかし、八犬士の大活躍によって里見勢は大勝利を収め、敵方の諸将を生け捕りにする。

しかし、里見義実の無益な殺生を避けるという大方針の元、捕虜はことごとく釈放され、国元に返還される。なおかつ、占領した敵の居城もすべて返してしまうのである。

こうして管領方との和睦が成り、戦争のない平和な時代が到来する。

八犬士は、当主義成の八人の娘と結婚し、それぞれ居城を与えられて、子を成し平穏な生活を送ることになる。しかし、彼らはそれで満足して平穏な一生を送る生活は望まない。

年を取った八人は、ことごとく家族と別れ、伏姫と八房の終焉の地となった富山に向かい、現世との一切の交流を断って神仙と化すのである。以上が物語の概要である。

馬琴の時代の言葉の遣い方

私はこの小説を読んでいて、原題に通用している漢字の使い方や意味が、馬琴の時代にはなるほどこういように使われていたのか、と思うことしばしばであった。

その一例を挙げてみよう。

現在隆盛をみている古武道の居合であるが、著者は坐撃という言葉を使っている。「いあい」とルビが付されている。以下一線を表示。

薄情一うたて

閑話休題一あだしことはさておき

鶏栖一とりい(鳥居)

一五一十一いちぶしじゅう

履を隔てて癪きを搔く一くつをへだててかゆきをか

四表八表の空談一よもやものむだはなし

左にも右ても一とにもかかても、

といった具合である。

漫画のような氏名諱(いみな)

また名前にも、現実にはありえないような滑稽な氏名が使われていて失笑を招く。

私たちが子供の頃漫画本で目にした滑稽な名前、伊佐坂変太(いささかへんた)、金成岡司(かなりおかし)大洞吹之助(おおぼらふきのすけ)刺賀矢留那(さすがやるな)といった類いである。

その一例。

赤熊如牛太猛勢(あかくまによぎゅうたたけなり)

渋谷柿八郎足脱(しぶやかきはちようたるぬき)

当场阿太郎(あてばあたろう)など。

なぜこうしたふざけた名を付けるかという、読者に媚びる部分も確かにあるが、私は、この物語は史実と虚構が入り混じっており、史実に登場する人物と完全に区別するために、敢えてありえない名を付けざるを得なかったと考えている。

浮世絵風の挿絵

ここで挿絵についても一言触れておきたい。

出像画工として浮世絵師の柳川重信の他数人が交代して絵を描いて(版を彫つて)いるが、いずれも浮世絵調で写実性に乏しく、浮世絵の欠点といってよいステロタイプの夫人画像に統一されていて、面白みがない。

戦闘場面や巨牛と格闘する場面などに、迫力があるものもあるが、画一的な画像に辟易し、物語の場面がともすれば挿絵に影響されそうになることに困惑した。

しかし当時の人たちは、挿絵に鼓舞され刺激されてこの物語を読んでいたのだから、現代の私に不満を述べる権利はなのかもしれない。





偶然の多出とご都合主義

さて、どの巻も読んでいて次から次に戦いや諍いや事件が起こり、読者を飽きさせるといことがない。作者の想像力は群を抜いており天才の名を辱めない。

ただし、近代文学ではマイナスの要素となるご都合主義、偶然の出会いの多出には幾分辟易させられる。

主人公が窮地に陥ると、神風が吹いたり奇跡が起こったりあり得ぬ助けが起こったりする。それらはすべて、伏姫神の神助であるとするのである。

したがって、八犬士にどのような危難が降りかかろうと(それなりにハラハラドキドキするのであるが)、読者は安心して次へ進むことができるのである。

偶然の出会いというのは、物語には必要不可欠な要素であるが、多用されると、物語への信頼性が薄れ感情移入が減速されてしまう。

近代娯楽大長編小説の傑作とされる中里介山『大菩薩峠』、吉川英治『宮本武蔵』の両小説でも出会いの偶然が多用されており、苦笑と失笑を再三強いられた記憶がある。

とはいえ大長編ともなると、ある程度の偶然の出会いは避けられないのかもしれない、必ずしも、偶然の出会いが、読者が納得のゆく必然である必要はないのかもしれない。それは大長編を書く執筆者にしか感得できない、物語の「綾」とでもいうべきものなのかもしれない。

とりあえず、私は懸案の『南総里見八犬伝』を読了して悦に入っているのである。



靖國神社奉納演武

<< 作成日時 : 2014/02/26 22:30 >>

2014年2月26日



忘れられない日

22日の土曜日は、私にとって忘れられない日となった。

お国のために戦って亡くなった二百四十六万余の御霊を祀った靖國神社の拝殿と能楽堂で、奉納演武を行うことが出来たからである。

能楽堂では舞踊や演武がしばしば行われているが、拝殿での真剣による四方祓いが行われたのは戦後初めてのことである。

刀道・文武両道塾という全く世に知られていない古武道剣術団体が、かくも絶大な栄誉に浴することが出来たのは、創美流華道家元の渡邊華靖先生の引立てがあったからである。

舞い込んだ僥倖

創美流華道は、何十年にも亘って毎年「献花の儀」を同拝殿で行っており、親しく付き合いさせていただいている家元から話が舞い込んできたのである。

献花の儀を始める前に、拝殿への邪鬼悪鬼の侵入を防ぎ、英霊の御霊を守護するため四方祓いを行って欲しい、という要請として参加が決まった。

祓いは私一人で行うが、門下生は型・試斬によって能楽堂で奉納演武を行う。この決定を門下生一同に伝えたところ、自分たちに舞い込んだ僥倖に感極まり、力の限り精一杯の演武を行うことを誓い稽古に励んだ次第である。

巻き藁処理が悩みの種

私たちの流派は剣術の型だけではなく、水に漬けた畳表(莫産)を、試斬台に立てて真剣で斬るということを行う。

巻き藁を斬るのは爽快であり、刃筋が斬撃の理に適ったものであるかどうか確認できる。また、試斬を見ている人も新鮮な驚きと満足感を得ることが出来る。

ところが、厄介なことが一つある。

試斬を行うためには、きつく巻いて紐で三か所止めた畳表を、ドラム缶などに入れて数日水に漬け(その間一二度水を入れ替える)、演武の日に水から取り出して水切りをした後梱包し、車で会場まで運ばなければならない。

それだけではない。

藁を斬った後大量の斬り屑がでる。その処理がまた大変なのである。現地で処理してくれるならそれに越したことはないが、持って帰らなければならないということになると、最悪のパターンとなる。

45リットルのゴミ袋十数個ともなると、家庭ゴミとしては到底処理できない。試斬演武にはそうした厄介事が付いて回る。

その点、空手や合気道、棒術及び型だけの古武道剣術などの演武は、何のハンディもなく気楽であるなあ〜などといひ羨ましく思ってしまう。

見ている人たちは、試斬台に立てた藁の運命を知る由もなくまた思い及ぼうともしない。そのギャップが試斬をする私たちを奮い立たせることになる。

設備万全の能楽堂控室

少し脇道に逸れたが、私たちの塾で一連の作業を一手に引き受けて行っている一人の塾生(彼がクルマを持っていることも要素に加わる)をねぎらうと共に、試斬という演武がかくも準備と後処理を必要とするものであるということを、一言述べておきたかったのである。

土曜日の首都高は混むというK君の提案で、前夜に藁を二人で梱包し(十本入り四束)、翌朝彼は早目に出発することになった。

当日、九時には全員集合。

創美流華道の方々は、拝殿横のスペースですでに生け花を行っておられる。献

花の儀は拝殿で行われるが、儀に伴うプレゼンテーションとお見受けした。

私たちは能楽堂控室で着替えを済ませ、まず、十一時から始まる四方祓いに備える。さすがに靖國神社の能楽堂である。立派な設備を備えた控室が二部屋あり、炊事場、手洗い所が完備している。

演武者四名、藁立てなどの手伝い二名、撮影一名計七名の陣容である。

三宝に大小を載せた先導者

十時十分全員参集殿に集合し受付を済ませて、陪観者八十余名の方々と共に拝殿に入る。

四方祓いに用いる刀はリハーサルの時にすでに拝殿に運び入れてある。

用いる刀は、大正時代に靖國神社で鍛刀された渡邊兼道作の二尺三寸八分である。

立ち合いの神官から、私の名前が告げられ、いよいよ四方祓いの挙行である。

塾で一番若いG君が先導。大きめの三宝に白布を置き、その上に錦の刀袋に入った大刀、ビロードの刀袋の小刀を乗せ、目の上に掲げて本殿に向かう位置に置き、引き下がる。

その後ろから進んできた私は、三宝に置かれた刀越しに、奥殿に祀られたあまたの英霊に向かってしばし平伏する。





四方祓い挙行

やおら刀袋を開いて大小を腰に差し、半膝になって唱え事(臨、兵、闘、者、皆、陣、列、在、前)をし印を切る。良(うしとら 北東)の方角に向かって正眼から七本を斬り納刀、対角線の方角(ひつじさ 坤)で五本、その列に並ぶ方角(いぬい 乾)で三本、その対角線上にある最後の場所(たつみ 巽)で、刀で光の字を斬る。そこで終了。

刀袋を収めた三宝に大小を載せ、再びG君が先導して場所へ戻る。続いて献花の儀が始まったが、折り畳み式の座椅子に座って陪観するのであるが、容赦なく外からの寒風が吹きぬけ、道着姿の全身を吹きぬけてゆく。

拝殿外の賽銭函の前では参拝客が引きも切らず賽銭を投げ、お祈りをする姿に押されての儀式である。気持ちが引き締まらざるを得ない。

後から聞いた話であるが、拝殿で真剣による四方祓いを行ったのは戦後初めてのことである。

試斬演武開始

一時間ほどで儀式終了。

弁当を使い、十三時から行われる能楽堂の演武に備える。

マイクを使い、数度に亘ってこれから行われる奉納演武の前宣伝をして、いよいよ演武開始。

四人全員の坐礼と刀礼。

最初の演武は、連盟制定の座り居合九本の型。少し説明してその型の試斬演武。続いて連盟制定の中伝の居合(組太刀)の型八本の演武。

これらの型は、剣術五百年の歴史を踏まえて各流派の奥伝秘伝を美味しく頂い

ており、そのエッセンスを集大成した型であることをアナウンスして、型をかなり詳しく説明しながら、三人で横一線に並び演じてもらう。

舞台から眺めると、百人近い人たちが観覧しており、手応え上々である。

まだ残雪が残る午前中は寒かったが、午後から温かい陽射しが降り注ぎ、観客もあまり寒い思いをしないで観覧することが出来たと思う。









迫真の実戦組太刀

続いて、各個人の演武、相対試斬と続いて、一つの山場である相対組太刀に移る。

私たちの文武両道塾は、実戦刀法を習得することにとさらに拘り、各古流に往々にして見られる、相手の身体に太刀が触れない組太刀に異を呈して、太刀先が相手の身体に触れる間合いから踏み込んでくるので、否応なく相手の刀を弾く必死の構えを演じてもらった。

これは連盟の型にはなく私が考案した文武両道塾のみに出来る迫真の実戦刀

法なのである。

師範代各のKさんと若手のG君による演武である。

終了後拍手喝采。叩頭する両君共に、演じている間異様にぎらついていた目付きが正常に戻っている。

最後に、私が藁を二本立ててもらい、体転を用いながら数度に亘って藁を両断、拍手を受ける。

藁立てに貢献してくれた後輩

藁立てを手伝ってくれたのは、私の後輩である連盟五段のTさん。

演武する三人はすべて三段でありTさんの遥かな後輩である。彼の力強い藁立てに風格が滲み出ている。

十三時の演武の後、もう一度同じ演目の演武が予定されている。

二回目もたくさんの方が見物に来てくれ、大いに盛り上がった。

試斬というのはそのときの気の持ち様が大きく左右することがあり、すべて必ずしも成功するわけではないが、その緊張感が失敗を十分に補ってくれるのである。

したがって、失敗したときに表情をあらわにすると、緊張が途切れ流れが途絶える。そのことは私は常々塾生に言い続けている。

したがってこの日も失敗をするりと受け止め、何食わぬ顔で続けてくれたので、大きな破綻は見られなかった。

かくて怪我も大きな失敗もなく靖國神社奉納演武を無事終了。斬り屑は神社の方で処理して頂けることになった。めでたしめでたしという他ない。

すべてを撤収後、神社の坂を下ったところにある居酒屋で打ち上げ。心も酒も大いに弾む。



京ことば『源氏物語』隔月連続語り第二十八回

<< 作成日時 : 2014/03/09 00:11 >>

2014年3月2日



数十年ぶりの大雪

2月15日土曜日午後二時半、いそいそと明大前「キッド・アイラック・アート・ホール」に向かう。

山下智子さんの語りの会がそこで行われる。

前日から朝方に掛けて間断なく雪が降り積り、東京で数十年ぶりという大雪となったが、朝には青天白日、雲一つない青空で、降り積もった雪が純白に輝き渡っていた。

交通機関にも大きな影響が出たが、不幸中の幸いというべきか、この日は土曜日とあって、勤め人の方々は胸を撫で下ろしたといったところである。

ホールは明大前駅から百歩ほどのところにあり、住いからも30分とはかからな
い近さである。さすがにいつもの作務衣に雪駄という訳にはいかず、洋服で出か
けた。語りの会に洋服で出かけたのは初めてである。



玉鬘は意外な人物の手に・・・

隔月でもう二十八回にもなるのであるが、物語は半分に達したばかりである。

九年間にも及ぶ息の長い連続語りであるが、行きがかり上終わりまで付き合いこ
とになるであろう。

今回は第三十一帖「真木柱」(まきばしら)。

時間を少し過ぎて会場に現れた語り部は、テキストを抱え、いつもの気品のある
楚々とした足取りで壇上に設 開口一番、記録的な大雪にも拘らず会場に脚を運
んでくれた聴衆に、感激の表情も顕わに感謝の言葉を述べけられた席に向かう。
た。

第三十一帖「真木柱」は少し長めなので前篇後編に分けて語る旨を述べ、前篇と
して区切った物語の筋を解説した。

この帖では、何帖にも亘って主人物として扱われてきた絶世の美女玉鬘が、意

外な人物の手中に落ちるシーンが出現する。

驚き慌てる源氏

玉鬘に恋慕する様々な人々を退けて姫君の居室に忍び込むことが出来たのは、意外なことに髭黒の大將(ひげぐろのだいしょう)であった。

「意外」というのは、玉鬘は髭黒をきらっていたからである。弁のおもとという女房が手引きしたのである。

驚き慌てたのは源氏である。姫を六条院の自邸の一角に引き取り、強引にものにするのを敢えて避け、足繁く通って慰めたり言い寄ったりして楽しんでいたのがあるが、トンビに油揚げをさらわれてしまったわけである。

しかし源氏は太政大臣という最高の地位にある権力者であり、うろたえ騒ぐのはみっともないことなので、二人を引き離すといった姑息な手段を取ることはなく、むしろ進んで二人を結婚させる。(このことで、語り部は面白い説を紹介するのであるが、それは後にのべることにする。)

立ち尽くす髭黒の大將

髭黒には北の方(正妻)がいて、二男一女を設けている。北の方は物の怪に憑りつかれていて、病の床に臥す身である。突然発作が起きるのであるが、普段は大人しくて気の優しい女性なのである。作者の描写から憶測すれば、(現代風に言えば)精神病を患っていると云ってよい。

夫が玉鬘のところに通うことを非難するどころか、出かけることを躊躇する夫に

「行かなくていいんですか？」とけしかける言動を敢えて取る。

もちろん、喜んでそう云っているのではない。悲しみと嫉妬を抑え、おおようなところを敢えて見せようとしているのである。

しかしそうした自分の矛盾した態度に嫌気が差し、鬱憤が一挙に爆発する。

自ら晴れ着の袖に香を焚き染めてやり、これから愛人の邸に向かおうとする夫の頭から香炉の灰を浴びせかける。

なす術もなく立ち尽くす髭黒の大將であった。

「真木柱」の帖の由来

北の方の鬱憤の爆発はこの物語の読者の鬱憤晴らしともなる。

妻に言いつくろって愛人のもとにせっせと通う身勝手な男に対する作者の仕返しでもあるだろう。(かつての光源氏そのものの姿である。)

髭黒は正妻の狂気を怖れて邸へ帰らなくなり、愛人玉鬘のところにとまり続ける。

源氏の仲介で結婚したのであるからすでに「愛人」ではなく「妻」であるが、それにしても髭黒を嫌って日々涙にくれる玉鬘の態度が解せない。自分の邸に居続ける髭黒を拒もうとせず受け入れているからである。

そういう玉鬘を見て源氏は尚侍(ないしのかみ)として宮中に上がるように彼女に奨める。

一方、北の方は皇族である式部卿の宮の娘であり(源氏の正妻の位置にある紫の上の姉妹)、式部卿は娘の恥を晒すような事態を避けるために、娘と孫たちを自邸に引き取ってしまう。

孫娘の一人は住み慣れた邸に別れを告げることを悲しみ、邸の真木柱の割れ目に惜別の歌を書いた紙きれを挟み込んで、母親と共に祖父である式部卿の宮の邸へ向かう。

源氏の権謀術数策？

前篇の物語の粗筋は、ざっと以上のようなものであるが、ここで先に述べた語り部山下さんが披露した「面白い話」というものを紹介しよう。

彼女は語りに入る前の解説で、知人と対話しているとき、「何故玉鬘は嫌っている髭黒と結婚したのだろうか？」と疑問を述べたところ、対話の相手は「すべて源氏が仕組んだことですよ」と事も無げに述べたというのだ。

語り部はそのとき新鮮な驚きを感じたそうである。

髭黒は将来関白摂政に上り詰めることが予想される地位にあり、源氏はそうした事態に備えるため、恩を売っておこうとしたのではないかというのである。

穿った見方ではあるが、そうした解釈が出来ないわけではない。

「新鮮な驚き」に異議

しかし、会終了後の打ち上げの場(地下の喫茶店)で、やはりそうした見方に対する反対意見が出た。

このホールでの語りの会に初めて出席したという初老の男性(元新聞記者であると名乗った)が、「そういう話は原文には一行も出ていない」と主張して、山下語り部の「新鮮な驚き」に異議を唱えたのである。

山下さんも解説で、「原文では一行も述べられていない」と断った上でのエピソード

ドの披露なのであったが、その肯定的な響きに元新聞記者だという『源氏』読みのおじさんが強力に反論した。

他の出席者は山下語り部に賛同気味で、例え作者が一行も述べていなくても、言外にそうした内容を読み取ることは可能であり、文学が提示する想像力とはそういうものではなかろうか、という意見もあった。

源氏の「企み」は権謀術数か

髭黒が玉鬘の寝屋に忍び込むことに成功したことを知った源氏が、驚き慌てながらもすぐさま二人を結婚させたくたりなどは、源氏の企みを予想させる材料となりうるが、やはりうがち過ぎた見方ではあるまいか。

源氏が将来の自分の地位が揺らぎ弱体化するのを慮って、秘蔵の姫を髭黒に与えたということになると、これまでの源氏の行動すべてに、自己安泰を図る権謀術数家の側面を読み取らなければならなくなる。

つまり、『源氏物語』の読み替えをしなければならなくなる。

元新聞記者のおじさんが、もしそういう主張をするのなら、その人物は新説として論文を発表すべきであると述べたことは正しい。

そこまで突っ込まれることを予想していなかったと思われる語り部山下さんは、戸惑い気味にうなずいておられたが、果たしてその決着は如何？

光源氏の愛すべき性格

『源氏物語』は古典中の古典である。その成立から千年の時を経て、様々な解釈、評論、時代背景などが無数に語られたに違いないが、定着した解釈以外に独

自の想像力を巡らして、異質の視点を投げ込んでみることは許されてよい。

しかしながら、源氏の女遍歴に権謀術数の影を読み取る試みは、源氏のおらかで、無邪気で、大胆で、それでいて責任感の強い愛すべき性格への共感を殺いでしまう恐れがある。

久しぶりに緊張感の漂う意義のある打ち上げ会であった。

映画『家族の灯り』ポルトガル・フランス合作

<< 作成日時 : 2014/03/23 22:51 >>

2014年3月23日



一缶のビールの必要性

知人から頂いた招待券を握って、カミサンを伴って神田の岩波ホールへ向かう。

今上映されている表題の映画を観るためである。往年の名女優ジャンヌ・モローとクラウディア・カルディナーレが競演するので話題を提供している。

ポルトガルとフランスの合作とあるが、モローはともかくカルディナーレはイタリアの女優である。どのような展開と内容なのか興味をそそられるではないか。

ホール内ではアルコールを売っていないので、近所のコンビニで缶ビールと

お茶を買い、館内に持ち込む。余計な緊張感を身体から抜いて映画を観賞するためには、一缶のビールがどうしても必要なのである。

アルコールによる脳髄の適度の痺れが、画面への透徹した眼差しを生む。



映画の冒頭シーン

上映時間になっても客の入りは三分の一ほどで、土曜日の午後だというのに客の入りが少ないのが寂しい。私たちも招待券で入っているのであるから大きなこととは言えないのであるが。

クレジットタイトルの背景はどこかの町の港である。繋がれた貨物船のような船と、岸壁に置かれた大きな碇が写り、背景の波が静かに岸壁に打ち寄せている。

ハンチングを被った若い男が右の横顔を見せて碇に手をかけて立っていたが、間もなく歩み去る。

冒頭のシーンはそうして始まる。

暗い室内から窓を通して外を見ている髪を後ろで編んだ若い女が外を眺めている。ヨーロッパのどこかの港町の入り組んだ路地と、石造りの低い屋並みの建物が前景に見える。

若い女が背後を振り返り、「義父さんはもうすぐ帰ってくる」と背後の母親らしき女に告げる。



往年のグラマー女優

母親の顔が写し出される。年を取ったクラウディア・カルディナーレだ。

昔彼女が出演した映画を何本か観た記憶があるが、豊満な肉体をしたイタリア美人であった。

私はこの映画を観る前は、イタリア女性らしく年相応に肥満した彼女を想像していたが、引き締まった顔付と肉体をしていたのでホッと気持ちになった。

太っていない代わりに、皺に刻まれた厳しい顔付をしており往年のグラマー女優を思い起こす要素はほとんどないが、ショールで隠された豊かな胸は保たれていた。

フランス語で話すポルトガルの映画

二人ともフランス語で話している。したがって、場所はフランスなのかもしれないが、雰囲気からすれば、ポルトガルの港町に違いないという確信のようなも

のがある(私はポルトガルに行ったことはないのであるが)。

この家の主人ジェボが帰ってくる。男の連れがいる。ジェボは中に入るように言うが、連れは「芸術は死んだ！」と喚き、今日は帰ると言って去ってゆく。

ジェボ役は、先だってこのホールで観たイタリア映画『楽園からの旅人』で主演の神父を演じたマイケル・ロンズデールである。

居間のテーブルにカルディナーレ演じる妻役のドロテシアとジェボが並んで座り、毎日繰り返しているであろう口論に近い会話の応酬が始まる。ドロテシアの口から出るのは、貧乏な境遇に甘んじていなければならない現在の境遇に対する果てしのない愚痴と夫に対する抗議である。

貧乏暮らしへの愚痴

「あなたの知り合いはみんな事業や商売に成功して裕福な暮らしをしているのに、あなたは未だに集金の帳簿付けのような地味な仕事を続けて、貧乏な暮らしから抜け出れないでいる」

と嫌みを込めて愚痴を垂れる。

夫は帳簿と向かい合いながら、

「私はこれまで人生に誠実に正直に生きてきた。今の暮らしはその結果だ」と答える。

貧乏暮らしにうんざりしている女房が、そんな答えで満足するはずはない。

「正直に誠実に生きてきた」ことはむしろ敗者の論理であり言い訳に過ぎないと思っっているかのようだ。

貧乏暮らしをする世界中のどの家庭にもある老夫婦の普遍的な会話である。

哲学的内容のキーワード

もう一つ妻のドロテシアには日々思い悩む出来事がある。一人息子のジョアンが八年前に若妻を置いて家を飛び出したまま帰ってこないことである。

どこでどうしているのか夫が情報を得てきてくれることを待ち望んでいるが、夫ジェボは曖昧な返事を繰り返すばかりだ。

そうした夫に愛想をつかしたように、ドロテシアは打ち沈んだまま寝室へ入って行く。

今まで義母が座っていた場所へ嫁のソフィアが座を占め、義父に慰めの言葉をかける。

嫁のソフィアは幼いころこの家に貰われるか拾われるかして育てられ、成人して一人息子のジョアンと結婚したらしいことが、二人の会話でそれとなく語られる。

また失踪している旦那であるジョアンのことで、「ドロテシアにすべてを正直に話したらどうか」という嫁に対して、彼女の手を握りしめながらジェボは、「本当のことは言わない方が良く。真実を知らなければ何事もなくものごとはずんでいく」

というふうな話をする。何気ない会話であるが、哲学的内容を含んだこの映画の眼目となるキーワードであると思う。

ジャンヌ・モローの濃密な存在感

その意味については後に考えることにして、粗筋の要約を進めよう。

そうしたある日突然放蕩息子のジョアンが家に帰ってくる。むろん家族全員が息子の帰還を喜ぶが、ジョアンは家族に心を許しているわけではない。

数日後ジェボが勤め先から帰宅した後、友人の音楽家と近所に住むドロテシアの友人である老婦人が訪ねてくる。その老婦人こそジャンヌ・モローその人で

ある。

（あたかも、この映画を観る前日、店の客が往年のフランス映画の名作『死刑台のエレベーター』の音楽を担当したマイルス・デイヴィスのサウンドトラック版のCDを持ってきてくれ、ステレオで流しながら主演女優のジャンヌ・モローについてあれこれ話をしたばかりであった。）

彼女は若く美しく、妖しい雰囲気をも身に着けた独特のキャラクターの持ち主であった。そのジャンヌが、容貌魁偉とでもいうべきあくの強い雰囲気を漂わせた老婦人としてスクリーンに登場している。

この映画での役柄は、近所に住むごく一般的な老いた有閑マダムに過ぎないチョイ役であるが、全身から発する雰囲気は、一筋縄ではいかない個性のある悪女役そのものである。

ごく最近岩波ホールで封切られた『クロワッサンで朝食を』で話題になったが、観なかったのが悪女役であったかどうか確認はしていない。彼女が登場するだけで、何かが起こりそうな予感を抱かせる濃密な存在感を漂わせている。

大金の入った鞆を見詰めるジョアン

客の中にもう一人、映画の冒頭部分でジェボが伴ってきたが中に入らず帰って行った音楽家がいたが、今日は客として家に招かれ、どうでもよい音楽論を吐露しながら、嫁のソフィアが入れたコーヒーの相伴にあずかっている。

ジェボ夫妻を交え四人で世間話をしているところへジョアンが現れ、どうでもよい退屈な世間話で時を浪費している皆に対して悪態をつく。

どろりと時間が停滞したようなこの家の雰囲気がたまらなく嫌で自分は家を出たということを用。嫁のソフィアがたしなめるがジョアンは悪態をつき続ける。

主人のジェボは、相変わらず帳簿と格闘している。テーブルには、ジェボが顧

客から預かった大金の入った鞆が置かれていて、帰ろうとした貴婦人のカンディニア(ジャンヌ・モロー)が「この鞆には大金が入っていて、このお金があれば当分遊んで暮らせる」というようなことを、ジョアンがいる前でこれ見よがしに呟くのである。鞆をじっと見詰めるジョアン。



自ら罪を被る父親

二人の客が帰った後、ジェボは鞆を棚の引き出しに入れて鍵をかけ、妻と共に寝室に退くが、居残っていたジョアンは、横にいる妻のソフィアに向かって「実は俺は泥棒なんだ」と宣言して、棚の引き出しをこじ開け大金の入った鞆を抱えて家を飛び出してゆく。

ソフィアは必死に止めようとするが突き飛ばされ、後を追うことが出来ない。物音に気付いたジェボが寝室から出てきて、何が起こったかを知る。

彼は傍らにいるソフィアに向かって、「妻に真実を語ってはならない。黙っているように」と念を押す。そうして、金が昨夜押し入った泥棒に盗まれた。自分の不用心を深くお詫びする、といった手紙を勤め先の会社へ書くが、途中で破り捨ててしまう。

翌日妻のドロテアは、そうした事情を知らず、ただ息子が再び家を出て行ったことをひたすら悲しみ、別室で泣き崩れている。

ジェボはある決心を固めており、嫁のソフィアと共に毅然として自分の席に座り、警察がやってくるのを待っている。

なだれ込んできた警察と会社の人間に向かって、「金は私が盗った」と告げる。その時は居間に出てきていた妻のドロテアは、驚愕のために顔を歪ませて呆然としている。そこで映画は終わる。

知ってよい真実とそうでない真実

「妻は(おそらく人間は)真実を知らない方が良い」とジェボは何度も云ったが、結局妻ドロテアに真実は語られなかった。

真実を語るあるいは知ることによって、現実には秩序を失いまた崩壊してしまうことがあるのである。知らなければ秩序は保たれ現実は何事もなく続いていく。

おそらくは、明るみにされてよい真実と暴かれるべきではない真実がある、ということをこの映画は言おうとしているのではないか。母ドロテアにとって息子ジョアンの実実は明るみにされるべきではないものであった。悲しみが余りにも大きいからである。

夫ジェボの会社の金の横領は、ドロテアにとって悲しむべき現実であるが、理解できない事柄ではない。日頃貧乏を嘆き夫の不甲斐なさを罵る妻にとって、夫のしたことは十分に理解できることであったからである。

平凡な日常性に対する反逆とは？

ジョアンは、日々暗く淀んだ平凡な毎日を忌避するが、父親が会社から預か

った大金を持ち逃げすることが、平凡で暗く淀んだ日常生活に対する反逆であり挑戦であると考えることが出来るであろうか？オリヴェイラ監督は、パンフレットに記載されたインタビュー記事の中で、「ジョアンは革命家である」と語っている。

革命は犯罪を超越するのであろうか？

これは庶民である一家庭の出来事であるが、国家規模で考えたとき、考えさせられるテーマとなる。

この映画を創ったのはポルトガルのマノエル・ド・オリヴェイラ監督である。1908年生まれというから今年106歳になる。この映画の製作は2012年であるから監督104歳の時の作品である。

しかもいまだに健在で毎年映画を制作しているという奇跡的存在である。的ではなくまさに奇跡そのものというべきである。こういう芸術家がまだ世界には存在するのだ。

レンブラントの絵のような映像

もう一つこの映画で述べておきたいのは映像の素晴らしさである。ランプをテーブルの中央に置いて会話をする男女の姿は、レンブラントやフェルメールの絵を直ちに想起させる。とても絵画的で揺るぎのない構図であり、観る者を安心させ落ち着かせ画面に引き入れる。

居間が主舞台であり、カメラは同じ場所からほとんど移動することがない。また、家の窓から見える路地裏の光景が、これも絵画的で魂の郷愁を誘う風景なのである。

ポルトガル人の書いた戯曲の映画化とのことであるから舞台的であるのは当然であるとしても、揺るぎのない写實的映像はリアリティを格段に増幅させる。

暗く救いようがない映画

とにかく徹底して暗く救いようのない映画であることは確かである。色っぽい場面は一カットもない。

全編を通して打ち沈んだ女のすすり泣きが聞こえ、外ではじめじめした雨が降り、主人はぶつぶつ数字を呟きながら帳簿を付け、一家を窮地に陥れる犯罪がその家の中で行われる。最後は主人の逮捕で幕を閉じる。

もし敢えて救いを見つけるとすれば、一家の主ジェバの、高望みせず、淡々と、誠実実直に日々を送る、孤高と言ってもよいその崇高ですらある生き方が描かれていることにある。

どこにでもある日常であるが、誰でもそのように生きることが出来るとは限らない。

上記の写真はすべて同映画のパンフレットからの転用であることを明記致します。

4月4日まで神田「岩波ホール」で上映中

『京ことば源氏物語』全五十四帖隔月連続語り第二十九回

<< 作成日時 : 2014/04/19 22:37 >>

2014年4月19日



「真木柱」後編

前回の大雪の日から二か月が経ち、桜の満開を迎えた良き春日での連続語りである。

二か月という月日は季節の移り変わりを大きく演出する。それだけ我々は年齢を積み重ねるのである。「もののあわれ」をそこはかたなく感じさせないではおれない。

この日は、前回の第三十一帖「真木柱」の後編である。恋に狂った髭黒の大將に見限りを付けた正妻(北の方)の実家式部の卿の宮家は、娘を孫たちと共に実家に引き取ってしまう。

髭黒は困惑し、また子供たちと離れ離れになることを悲しみ、宮家を訪ねるが妻にも娘にも逢わせてもらえない。気持ちを思い定めた髭黒は宮家との交流を断ち、玉鬘という珠玉を手中にしたことに有頂天となつてご満悦である。

尚侍として宮中へ

しかし、玉鬘自身は鬱々とした日を過ごし、行く末への希望を失って嘆き悲しんでいる。髭黒をよほど嫌っているふうに見えるが、一たび契りを躲し夫となった相手の欲求を拒むことは許されない。

源氏はそうした玉鬘の立場に同情し、髭黒に盗み取られたことを悔しがると共に、文を渡して心情を慰め合うのである。

尚侍(ないしのかみ)に選任された玉鬘に宮中へ上ることを源氏は奨める。尚侍として宮中へ上がることは、帝のお手付きとなる可能性を持つということである。慌てたのは玉鬘にぞっこんの髭黒である。

実際そういうことが起こる寸前まで事態は前に進む。

玉鬘の部屋へ帝が…

かねてより玉鬘の美貌を聞き知っていた帝は、玉鬘の局へ足を運ぶのである。そのことを聞いた髭黒は慌てふためき、何かと理由を付けて帝が局から立ち去るように画策する。

この場面は(髭黒の立場を考えると)緊迫しながらも滑稽なシーンであり、もし映画のシーンとして描かれたとすると、髭黒の演技の真骨頂が問われる場面といえよう。

帝は、尚侍が髭黒の妻であることを知ってはいるが、自分をその場から引き離そ

うとする髭黒に不快と不満を感じることを否めない。気性の強い帝であれば、誰の妻であろうが愛人であろうが、尚侍に手を付ける強引さがあっても不思議ではない。

玉鬘物語の幕

髭黒にとって幸いなことに、源氏の実子である冷泉帝はそうした強引さを併せ持たず、後を振り返りながら局から立ち去る。

冷や汗を掻きつつも胸を撫で下ろした髭黒は、このまま玉鬘を局に置いておいては危ないと実感し、風邪気味で具合が悪いので宮中から引き取らせてもらうと告げ、玉鬘を伴って自邸に帰ってしまうのである。

小説的な面白さを堪能させてくれる場面である。トンビに油揚げを攫われた(山下さんの表現)態の源氏は、玉鬘をきっぱりと自邸に引き取った髭黒に嫉妬し、自身の迂闊さを悔い悩むがもはやなす術がない。

やがて玉鬘が髭黒との間に第一子をもうけたニュースが語られる。

玉鬘が夫である髭黒をどう思っているかはともかくとしても、彼女は落ち着くところに落ち着いたのである。山下語り部によると、十帖に亘って続いた玉鬘物語はこの場面で幕となるとのことである。

近江の君の登場

場面は転換し、奇矯な言動で人々を驚かす内大臣の娘近江の君が登場する。

弘徽殿の女御(近江の君の姉)御殿で音楽の遊びを行っていた殿上人の中に、夕霧の中将(光源氏の子息)の姿を見つけて「このお方よ、このお方よ」と褒めそやし、女房たちの困惑をよそに即興の恋の歌を詠んだりするのである。

むろん中将はあきれ果て、私にはその気はありませんと返歌する。そのシーンでこの帖は終わる。玉鬘中心の物語に終止符を打つ鮮やかな場面転換である。

少し時間があるということで、語り部は、源氏が断ちきれない玉鬘への思いを募らせながら、何度も文を渡して回顧する場面の原文をしばし朗読した。語り部が原文を朗読するときのあのりと張りつめた声は、耳に心地よく身が引き締まる思いである。



京都に帰って行く語り部

終わりに当たって語り部は、東京を引き払い故郷の京都に移り住む旨を聴衆に告げた。

私にとって晴天の霹靂であるが、東京でのこの会は終わりまで続けることを明らかにし、二か月後にまたお会いしましょうと努めて朗らかな声で語りかけた。

恋人に「さよなら」を告げられたように暗澹とした気持ちになり、寂しかった。

しかしまた二か月後に逢える。その待ち遠しい気持ちは、私にとって、新しい帖の内容が幾重にも色濃く心に沁みてくるに違いないという確信にとって代わる気がするのである。

2014年4月13日



読み切れていないのでは、との危惧

今からほぼ二年前、私はこの本の感想をブログに書いた。それを見たご本人は私の感想に不満で、もう一度読んで欲しいと言ってきた。

私は、睡魔と闘いながらやっと読み終えたこの小説を再読する気力はないと本人に伝えた。

しかし、私にはこの小説をもう一度読むだろうという予感のようなものがあつた。なぜなら、「すべてが曖昧である」とした自身の感想に、読み切れていないのではないかという危惧があつたからである。

重大な読み違い

この長編小説をいつも手が届く場所に置いておいて二年が経過した。

二週間ほど前、図書館から借りてきた本をすべて読み終えた後、何気なくこの本を手を取った。

今度は睡魔と闘う必要はなかった。何を見逃していたのか注意深く行間を読み解こうとして気持ちが前のめりになっており、三日ほどで読み終えることが出来た。

その結果、私は作者がはっきりと述べていることに対して、重大な読み違いをしていることに気付いた。

父親を取り違える

小説の主人公である「鉦山技師」の実父を、鉦山会社のケーブルカーの管理人をしていた長津という人物であると読み違えていたのである。

この人物は会社の第二組合を組織し活動に全精力をつぎ込んだ挙句、知能が遅れた幼い娘と無理心中をして(首吊り)果てたのであるが、もう一人この会社で働いていて首を吊って死んだ男がいたのである。

会社の金を使い込み、それを苦にして自殺した。その男こそが鉦山技師の父親であり、ケーブルカーの管理人長津はかかわりのない人間だったのである。

呼称の変化

村では長津の首吊りが余りにも有名であり、もう一人首を吊った技師の実父は事件そのものがほとんど忘れ去られていて、村人たちの早とちりもあり、技師の首を吊って死んだ父はケーブルカーの管理人ということになってしまったのである。

作者は技師の呼び方を微妙に変えている。冒頭部分ではどこの誰と特定されな

い無名性の呼称である「カレ」と呼ばれ、父親がケーブルカーの管理人である長津とされてからは「彼」というふうに特定され、ついには「長津」と呼ばれることになる。

本人も長津に成り済まし、その人物を父親として自殺の真相に目を向けてゆくのである。

会社の金を使い込んで自殺した実父については彼はほとんど関心を持たず、もう一人の首吊り人である長津について彼はその真相を知ろうと努力する。そうして自らを長津と呼ばせるのである。

二人の首吊り人

鉾山技師という肩書は単なる触れ込みであり、彼は父親の死の真相について知るために、父親と共に過ごしたことのある山奥の村にやって来たのである。

私がそうであったように、漫然と読んでしまえば取り違えてしまう首吊り人を何故二人(実はもう一人首吊り人が存在する)設定しなければならなかったのか、そのところが釈然としない。

(カレは実父が首を吊るのを目の前で見届けながら、その場から逃げ去ったことに罪の意識を抱いており、最後のシーンにつなげるためにはどうしても必要であったということであろう。)

ケーブルカー管理人長津の首吊りの謎は次第に解き明かされてゆくが、そのことと息子を詐称する偽の鉾山技の間に関連があるのか、その謎を解き明かし彼はどうしようというのか、それがはっきりしない。

百合丘は生きていたのか？

もう一つ、注意深く読みこんだつもりであるが、長津の自殺の原因ともなった、第二組合をほう助するためにオルグと一緒に村にやって来た都会の娘百合丘の存在である。オルグの野島は愛人でもあった百合丘を村に残して消えてしまう。

彼女は、生活のめどが立たず移動する金もない。その村から出るための資金の「返済」として村人に身体を与えるという暴挙を敢えてして、村を出た後に自殺するという新聞記事を作者は提出していたはずである。

しかし自称刑事のキーボ(希望?)によると、ビリヤッド台が置いてある村唯一のクラブの二階にひっそりと暮らしているという。

村人はキーボの幻想であるという信じてないが、キーボがしゃべることはこれまでの経緯からして虚言は含まれていない。

であるからには、村人による輪姦の代償としてお金を受け取って村を出た後自殺したとされる百合丘は、生きていてまた村に帰ってきたことになる。

帰ってきた時の様子はどこにも書かれてはおらず、キーボの幻想ではないとすれば、作者は読者に想像を委ねる意図的に曖昧な記述を行っているとしたか考えられない。

私は初読後のブログで「すべてが曖昧なままである」と書いて、作者から、「よく読めば分かるようになっている。曖昧な記述は何処にもない」とたしなめられたが、この百合丘の存在に関しては、注意深く読み込んだが解決は見出されなかった。

少年時代のカレ

結末の文章についても、意味不明として曖昧さの指摘の一部としたが、この部分は読み解くことが出来た。

「カレ」が鉦山技師として村に帰ってきた時、中学校の校庭のバックネットにもたれかかって立つ少年の幻影(実父の首吊り自殺を目撃した直後の自分)を睨に描くシーンがあるが、その姿が再現されたのであり、そこで首吊り自殺をしたのは(村で三人目の首吊り自殺者)、人前で首吊りを演じて見せることに生き甲斐を見出していた三橋老人その人であった。

長津が目撃したその光景は、中学生の時目の前で起った父親の首吊りを再現したものであり、再びその光景を目にしたことを「カレ」は「幸運」と受け取るのである。

そのとき、鉦山技師は最早「彼」ではなく「長津」でもない。登場した時の「カレ」に戻っている。こうして円環が閉じられる。

別に進行するもう一つの話

鉦山技師にまつわる話とは別に、並行して村にまつわるもう一つの話が語られる。

村の中学校の校長の娘晴子が、村を出て町の中学校へ転入した弟に手紙を書くという形で、自分の身の回りに起こったことを延々と書き連ねる形式で物語が進行する。

手紙という体裁を採っているが、内容は状況の説明であり、心理分析であり、独白である。

内容は一中学生が理解できるようなものではなく、その必要もなく、単に饒舌に書くという動作だけが文章の目的となっている。

その内容の大部分は、村の学校に赴任してきて宿直室へ寝泊りしている独身の中年教師とのやり取りと会話で成り立っている。

教師クリニオの登場

その教師はクリニオという徒名で呼ばれていて、首吊りの真似事をしている三橋老人の娘マユコが、クリニオに米を借りに赴くところから長い物語が始まる。

マユコはクリニオに恋するようになり、借りた米の代償に自分の身体を提供すること(彼の恋人となること)を夢想する。

しかし、クリニオはマユコにそれほど関心がない。彼は直接マユコではなく、マユコと交流がある晴子に語る方法を選び、マユコも晴子に手紙を託したり伝言を述べたりする。

晴子は二人の心理を分析したり、クリニオの曖昧で決断しがらない態度を難詰したりする。クリニオが住む宿直室と自宅を往復しているうちに、(彼女は決して中には入らない。窓の外から会話するのである。)クリニオの実態が分かってくる。

教師クリニオの実態

かつて彼は結婚していたが今は離婚して町から遠く離れた山中の学校へ志願して赴任してきたこと、青年時代父親の愛人と関係を持っていたこと、現在民子というよく発達をした身体を持つ中学生とできていて宿直室で乳繰り合っていること、などが分かってくる。

クリニオを慕うマユコのその事実を告げていいものかどうか迷うが、結局はその事実を告げるがマユコのクリニオに対する思慕の気持ちに変わりはない。

クリニオは、マユコが村唯一のクラブに住むテツという若い工事人夫のところで暮らしを共にするという条件を呑むなら、マユコを愛人にしてもよいと述べる。そういう状況でなければマユコに興味湧かないという変態なのである。

晴子はマユコとクリニオのメッセンジャー役なのであるが、晴子自体クリニオに魅かれていることが匂わされている。破廉恥漢は女に好かれる魅力をたっぷりと持ち合わせているのだ。

クリニオの言葉に従ってマユコはクラブに出向きテツと同居するようになる。マユコがテツと愛人関係になったことを聞き、クリニオはマユコを抱くのである。

確立された物語形式

鉾山技師の物語とは別個の「手紙」の内容は、同じ狭い村の出来事であるから、三橋老人、テツその他登場人物が重なるが、最後に両者が融合して一つの事件に収束するという態のものではない。

晴子の手紙は延々と独白が続くという形をとっており、晴子が手紙で物語る内容によって様々な出来事が報告されるのである。出来事が直接作者によって語られるわけではないのだ。

初読での異常なほどの眠気はその辺りからきているように思われるのである。

出来事のほとんどが登場人物の異様に長い会話や独白によって語られるという形式は、前作『喪服の町』で確立され、その手法がこの本でも貫かれている。

作者は何を描きたかったのか

しかし『喪服の町』は、この作品のように「何がどうなっているの？」と考えさせられるような個所はほとんどなく、登場人物の長い長い会話や独白に従ってゆけ

ば、眠気を誘う心地よいリズムと作者の感性豊かな文章を堪能できた。

『村のビリヤッド』には様々な仕掛けが施されていて、つまづきながら読み進まなくてはならない分眠気も一段と増すのである。

作者は、違ったタームの二つの物語を交互に書き綴ることによって何を目指したのであろうか？

廃坑になって活気がなくなった北国の山中の小さな村の閉ざされた空間の中で生起する出来事と、どんな小さな出来事でも人々の噂になりまたその渦中の人物となりうる人間心理の、濃密で錯綜した内面を描きたかったのかもしれない。あるいは女心の複雑で多感で相矛盾した心情をそこに重ね合わせたかったのかもしれない。

村上春樹の小説

二つの異なった物語を同時進行形で書き進む手法は、警察小説やミステリー小説などでも多用されるが、私はごく最近読んだ村上春樹の小説『1Q84』を思い浮かべた。

青豆という必殺仕掛人のような女性と、予備校で数学を教える小説家志望の堅吾と名付けられた同年男性の、共に奇妙な生活が並行して描かれる。

二人には見事なまでの接点があり、二人の物語は次第に一つに合わさってゆくのである。

村上の小説には嫌でも印象に残るシュールリアリスティックな場面設定があり、読者の想像力を掻き立てて止まない。

『1Q84』では夜空に掛かる二つの月であり、死んだ動物や人間の口から吐き出されてくるリトルピープルと呼ばれる小人の存在である。

『ねじ巻き鳥クロニクル』では、人間の生き皮を剥ぐ詳細な記述はとても印象に残るし、『海辺のカフカ』では、空から魚が降ってきたり、口から巨大な青虫を吐き出すシーン等が鮮明な記憶となって残る。

目覚ましい長編小説に期待

小説には大胆なそうした仕掛けが読者を作品に引き付ける要素が必要であることを村上は熟知している。

最上にはそうした要素はほとんどといってよいくらい無い。『村のビリヤッド』では、自殺や輪姦シーンがそれに相当するが、彼は細述することはしない。匂わせるだけである。その分インパクトに欠ける。

とはいえ、最上は独特の文体を持っており、奥行きが深い心理描写と、適切で納得のゆく暗喩・隠喩の能力は村上春樹に勝るとも劣らない。

彼が長い長い会話による手法に依らず、直接話法で物語を進行させれば、眠気を払拭させるような目覚ましい長編小説にたどり着くのではないかと思ったりするのである。

2014年5月16日

アルコール依存症の基準

私は、酒は強い方ではないが365日摂取している。酒を飲むと精神が高揚し気持ちが悪くなるからである。ある程度以上アルコールが入ると、大抵の人は体がだるくなり、歩行が乱れ、気力が喪失し、眠くなる。

「ある程度以上」というのは、嗜みの限度を若干超えた程度と思ってもらえば良い。

むろん嗜みには個人の格差があり、「これくらい」という客観的基準を示すことはできないが、アルコール依存症にならない日々の酒量は、ビール大瓶二本、ウイスキーダブル二杯、日本酒二合以内というのが医師たちが提示する基準である。しかも、週一の休肝日を設けるというのが条件である。

今述べた基準で30年間毎日飲み続ければ例外なくアルコール依存症になる、というのが学会の基準のようである。

医師の責任逃れ

毎日酒を飲む私は、常日頃疑問に思っていることがある。

「アルコール依存症」というのは以前の言葉では「アルコール中毒」であるが、その定義が極めて曖昧なことである。

「アル中」の症状として考えられるのは、物を持つ手が震える、粗暴になる、日常生活に対する気力を無くする、肝臓機能を害する、といったことであるが、30年以上

飲み続けている人がすべてそうなるわけではない。むしろ、そうなる人の方が少ないと私は思っている。

医者は常に基準をより厳密に設定しがちである。閾値限度すれすれ生活してきた人たちが、その閾値限度の病気になったとき、「医者が安全だと言っているのに病気になってしまった」と訴えられることを防ぐためである。つまり責任逃れである。

飲み続ければ肝硬変？

現在では高血圧、高脂血症、腹囲等の見直しが行われており、従来より基準が緩やかになった。

だがアユコール依存症については見直しが行われた形跡がない。

アルコールの摂取過多は悪として受け止められている感がある。

酒の強い人が一日日本酒二合で満足できるであろうか？大きな個体差があるのではなかろうか？

つまり、人体に対するアルコールの影響に対して、厳密な科学的根拠が曖昧なのである。

アルコールが肝臓に及ぼす影響については、ある程度研究が進んでおり、一合の酒を肝臓が分解する時間は12時間程度かかるとされている。二合飲めば24時間分解に要することになる。二合以上飲んだ人が翌日また二合以上飲めば、肝臓は分解しきれなくなり、その成分を蓄積してしまい、それが長年続けば肝硬変などを引き起こすということになっている。肝臓とアルコールの関係が一日の酒量の目安となっているわけである。

脳とアルコールの関係

もう一つ重要なことは(このことを私は述べたいのであるが)、アルコールと精神の関係である。

脳とアルコールの関係については、医師はある程度の判断が可能である。アル中患者の精神的異常の原因の一つとして、記憶や思考をつかさどる海馬(脳幹の奥)の損傷が挙げられている。

アル中状態(その基準は依然として不確かである)になると、記憶が不確かになり思考がまとまらず妄想を招きやすいという「症状」となって表面化する。

しかしながら、脳とアルコールの関係については一般の人に納得できる説明が未だになされていない。

人類の最古からの命題に現代科学は回答を見出せていないのである。

その最も端的な例は(酒飲みがその都度感じているごく身近な命題)、その時の精神状態によって酔い方が極端に違うということがある。

現代医学が説明できない

酒飲みでも酒一合で酔ってしまうことがある反面、一合徳利五本を倒しても酔わないということがある。

精神状態が快調であるとアルコールは脳髄を麻痺することが出来ないのだ。

これは何故なのか？血中濃度は同じなのに、何故脳髄に作用する程度が違うのか？

このところは医学は説明出来ていない。酒を飲む場が自分の思うような状態で進行し、自分の意見が思う様に開陳出来る時、アルコールは脳髄を麻痺させること

が出来ないばかりか、これまで考えられなかったような新しい思考の展開をもたらすことが出来る(新入社員は先輩の飲酒の誘いにぜひ加わるべきである)。

李白酒一斗詩百篇

精神が活発になったとき、もしかしたら、脳髄にアルコールが流入することを防ぐ何らかの神経伝達物質が働いているのかもしれない。あるいは、アルコールが精神を活発化させる脳髄の部位を刺激するのかもしれない。

精神状況が良好というだけではない。アルコールを摂取することによって、精神が活発となり創造への意欲が増すということがあるのだ。

普通酒を飲むと体がだるくなり思考や行動の意欲が減退するとされるが、飲めば飲むほど生き生きと脳髄が働き、創造への意欲が増すという状況について、精神医学は何の説明もできないでいる。

大酒のみで知られる詩仙李白について杜甫は「李白酒一斗詩百篇」と書いている。つまり、李白は飲めば飲むほど詩への意欲が昂じたのである。

酒飲みの天才とアルコール

アルコールと創造的意欲の関係について一考させられる事例である。

李白の天才とは無縁であるが、かく云う私もまた飲めば飲むほど創造への意欲が増す部類である。歩くのに困難なほど酒を飲んでも(いやそうであるからこそ)詩即興朗唱が冴える。中途半端な飲酒はむしろ思考を阻害する。

何故そういう現象が起きるのか私にも分からない。

アルコールが脳髄のどの部分に作用したとき気分が高揚するのか、あるいは減退するのか、「精神状況」に際してアルコールがどういう作用を脳髄に及ぼすのか、ぜひとも解明してもらいたい学問的課題である。

精神医学のみならず、およそ医学に携わるすべての先生方に、解決すべき命題として提起したい。

野生尺八 大由鬼山』

<< 作成日時 : 2014/06/07 11:23 >>

2014年6月5日



尺八でオールジャズナンバー

五月の TPC(「トーキョー・ポエット・カフェ」)ライブは「野生尺八」を名乗る大由鬼山さんをお願いした。すでにこれまで二度出演してもらっている。

七、八年前になるが、「日本文化普及会」所属時に江戸東京博物館大ホールで刀術の公演をしたとき、私の出演部分で彼の尺八に競演してもらった。

その縁で、TPC ライブにすでに二回出てもらっている。

一回目の時の様子を私は良く覚えていて、他の出演者たちとの歓談の折りなどによく話すことがある。

鬼山さんは、店に入ってきたとき店内の様子を窺いある決断をした。

その内容はライブ開始に当たって述べられた。

私は店に、数週間前に観たばかりのソニー・ロリンス公演(中野サンプラザ)時のポスターを張っており、カウンター上の壁面に、他の画家の作品と共に春原さん制

作のマイルス・デイビスの版画を掲げている。

それを目ざとく見つけた彼は、「この店はジャズがお好きなようなので、今日の演奏はすべてジャズナンバーでいきます」と宣言したのである。



尺八を吹きながら声を出す

尺八というからには、古典の名曲や日本の歌謡・民謡などの曲目を期待するが、すべてジャズでやるというのだからびっくり魂消た次第である。お客さんも目を白黒させたことであろう。

主催者側である私は敢えて注文を付けず、彼の選曲に任せることにした。全十曲余、ジャズのスタンダードナンバーを彼は吹き切った。楽器が尺八とは思えないジャズのフィーリングそのものであり、彼が普段コンボ演奏でジャズを吹いていることを窺わせるのに十分なほど、こなれた間と高揚感に溢れた歯切れの良いリズムが印象的であった。

彼の演奏の特色の一つは、尺八を吹きながら実際に声を出すことである。肉声で掛け声とも取れる合の手を入れるのである。それが演奏の高揚感をさらに掻き立て熱狂の渦を創る。

体制の変革か意識の変革か

この日の演奏はジャズオンリーではなかったが、日本民謡もリンゴ追分も、間奏に必ずジャズ風のアドリブを入れ独自の曲想に仕立て上げていた。

私は詩即興をやるつもりはなくむろん彼にも何の打ち合わせをしていなかったが、野生尺八を聴いているうちに気持ちが高ぶってきて、彼が演奏を終えた後、即興朗唱のお手合わせをお願いしたのである。

聴いているうちにすでにテーマは決まっていた。

「体制の変革か意識の変革か」それがテーマである。いつものように突然思いついたのである。

カウンターの内側ですでに焼酎をロックで五杯ほど飲んでいる。詩即興朗唱の発現に最も手頃な酒量である。

鬼山さんに音を促しておいて、まず語りの口調で言葉を発する。

「私はずっと若い頃、学園紛争を戦ってきた一人の学生から、『サドハラサンは自己変革についてどう思いますか？』と問いかけられた。私ははっきりと答えることが出来ず、私よりも五歳も若いその学生の失笑を買った。

そのころ、マルクスの云う体制の変革か、ランボーが提起する意識の変革か、というテーゼを巡る議論が盛んで、その答え方によって人物の価値が判断されるといふ機運が盛んであった。」

全身から溢れ出る意識の渦

その辺りから私はポエジーのモードに切り替える。

「しかし、私は今では明言できる。

革命によって社会の体制をひっくり返すことはかっこいい。

だが意識の変革があって初めて社会の変革が成し遂げられる。

たとえ体制をひっくり返した革命側に組したとしても、

意識が付和雷同であればやがて革命は一つの制度として体制となる。

自分の意識が、精神が、魂が、百倍にまで膨れ上がり高揚して

初めて体制は緊張を孕み、変革の志を持続することが出来る。

常に物事をよく考え、

本を読み、

美的体験を積み重ね、

現状を批判の眼で眺め続け、

突破する意欲を掻き立て、

ギリギリと歯噛みをするほどに憤怒の情を持ち、

感動と喜悦の感情を爆発させる。

そうした智と情動を、足の裏から脳髓のてっぺんまで溢れさせ、

肉体が爆発する寸前までパンパンに張りつめた状態になったとき、

ある日突然意識が止めどなく溢れ出てきて、

精神のモードが切り替わる。

世界は完全に新しい装いで目の前に現れる。

どのような既成の宗教も思想も借りることもなく、

自分の両足で屹立した精神で世界と向き合うことになる。

そのとき

体制も、革命も、また人間すら超えていて、

一個の個体として大宇宙と向き合って存在する自分を認識する。

これが意識の変革である！

私はそう思うのです。」

一言一句の再現ではないが、大体においてそのようなことを発語した。

背後で、鬼山さんが渾身の演奏をしてくれていることを確認し、言葉が音によって完成させられる瞬間を体験することが出来た。

終わって握手を交わしたとき彼は、「いつかサドハラサンとの競演の記録を残したいですね」と言ってくれた。



『京ことば 源氏物語』全五十四帖隔月連続語り第三十回

<< 作成日時 : 2014/06/16 00:37 >>

2014年6月15日



前代未聞の長丁場の語り

この語りの会が始まってすでに五年余が過ぎ去った。全巻を語り終えるのには、さらに五年を要するという。類を見ない長丁場の語りの会である。

私は初回から参加しこれまで二回しか欠席していない。執念と意地の結果である。

語り部本人にしても同じであろう。語り部はこれまで足首を骨折したり風邪をひいたりしたアクシデントに見舞われたが、執念と意地、それに強い義務感によって、欠席なしでやってこられたのであり、これからもどのようなことがあろうとも、公演予定日に休むということはないと確信できるほど、彼女はこの会に思い入れているように思われる。

私も最終回まで付き合い積りであり、会に出席した証であるこのブログを可能な限り発表していこうと思っている。あと五年というとは私は70歳代後半となっており、生きているかどうかも定かではない。むろん語り部もそれなりに年齢を重ねる。主人公の光源氏も年を取る。

切れ目なく持続するということは、肉体と精神の推移をつぶさに見届けるといふことである。そのことによって精神は成熟し深まっていく。



大規模な薫物競べ

さて、前置きが長くなってしまったが、この回は第三十四帖「梅枝(うめがえ)」の巻である。源氏が明石謹慎のおり、見初めて馴染みとなった女性明石の御方(後に源氏の自邸六条院に引き取られる)との間に生まれた姫君はすでに11歳となり、女性の元服ともいべき「御裳着(おもぎ)」の儀式を迎えようとしている。

同じ年に元服を迎える東宮(皇太子 朱雀院の皇子)に入内(じゅだい)が決まっている。順当に東宮が天子の位を継ぐと、皇后ともなりうる立場の女性である。

したがって源氏は緒裳着を重視し、贅を尽くして儀式を盛り立てようとする。その手始めに「薫物(たきもの)競べ」を思い付く。

薫物というのは香木を焚いてその香を「聞く」ということである。語り部も解説の部で述べておられたが、その世界では嗅ぐではなく聞くという。平安時代にはすでに大陸伝来の香木の香を楽しむ風習が成立しており、貴族たちは香木の香を着物の袖に炊き込めたりして、その風習を競い合った。

何種類かの香木を砕いて混ぜ合わせ、それぞれ独自の香りを創作して、その質を判定し合うのが薫物競べ(あるいは薫物合わせ)である。

源氏は、正妻ともいべき紫の上を始めとして、親類縁者女房方にまで独自の練り香を創らせ、弟君である蛭兵部卿宮を判定者として任命する。判定の結果優れた香を明石の姫君の入内の持ち物に加えるためである。

悠長にして優雅な時間

暇を持て余す貴族たちとは、様々な遊びを考え、(この帖で後半語られる書もそうであるが)日々をそのことに費やし、ついには日本の古き良き伝統にまで昇華させていった。

その悠長にして優雅な時間の推移は、ひたすらに慌ただしく過ぎ去ってゆく現代の時間と比較しようもなく、たっぷり時間をかけた思索と芸の道の探求が、精神を豊かにさせて行った推移を物語る証となっている。

蛭兵部卿を判定者とした薫物競べの様子が詳しく語られるが、風習は室町時代には芸道にまで昇華し、現在でも香道として受け継がれている。

現代に伝えられる香道

話は本題から少しずれるが、昨年私は縁あって香道の「聞香(もんこう)」という遊びの席に出席したのであるが、その経緯について少し述べてみたい。

文字通り香を聞く会である。

どういう流派であったか失念したが、和服姿の師範の女性が、正座をした十数人の客たちに香道の歴史を述べ、この会(聞香)がどういう作法を必要とするかを砕けた様子で述べて後聞香が始まる。

お弟子さんによって香が焚かれ、香炉が各人に回され、独特な作法で香りを聞き次に回す。それぞれ名の付いた三種類の香木の香を聞き、今度は名を伏せて順不同で同じ三種類の香を回す。

名を伏せられて回ってきた香が、前のどの香の匂いであるかを判断し、あらかじめ名を書いて配られた用紙に記していく。

拷問に近い正座

その間優に一時間を経過している。長年の剣術の稽古と加齢による膝の故障もあって、一時間の正座は拷問に近い。

脚の組み方を変えたり重心を前後にずらしたりしながら何とか耐えたが、脚は痺れてしまっていてすでに感覚は無くなっている。

成績発表が終わりやっと拷問から解放されることになった。何とか立ち上がりよろけながらトイレに向かい、用を足して部屋戻ってきた時、居残っていた女性たちが私の姿を見てくすくす笑っている。

足元を差す人もいたので見てみると、何と片足がトイレのスリッパを突っ掛けたままでいたのであった！

このときでも脚は痺れたまま感覚を取り戻しておらず、スリッパを突っ掛けている感覚は無かった。

とんだ大恥をかいたが、女性たちも長時間の正座が相当堪えていて、私の失態に対して同情を込めた忍び笑いであったように思われた。

日本の芸事に正座は付き物であり、一時間の正座に耐えられないというのは、芸事を学ぶ資格がないと云われても仕方がない。

私たち古武道修行者は床に直に正座するのであるが、まず十分以上座り続けることはない。もっと若い頃から正座の鍛練をするべきであったと埒もない思いに捉われた次第である。

源氏物語原文朗読

少しは関連があるとはいえ本題を大きくずれた笑い話に落ちてしまったが、『源氏物語』の風景が現代にまで脈々と伝えられているその感動を伝えたかったのである。

「梅木」の帖はその最後に、源氏の子息である夕霧の中將と内大臣の娘である雲井雁(くもいのかり)の恋物語に言及して終わるが、次帖からはその経緯がどのように語られるか注意をして語りを聴いていきたい。

この帖が少し短いということで、冒頭からかなりの部分まで原文朗読が行われた。

始めに解説と京ことばによる朗読を聴いているから原文の意味を半分ほど解

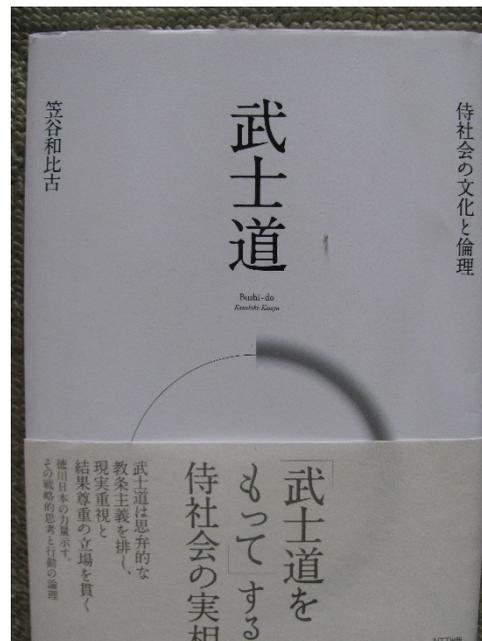
読できたが、理解ということとはまた別に、流麗で気品のある古文の凜とした響きは、意味を浄化した音声として心地よく脳髄に沁み渡った。



『武士道 侍社会の文化と倫理』(笠谷和比古著)を読む

<< 作成日時 : 2014/07/21 12:16 >>

2014年7月20日



武士道に対する関心

私は最近武士道ということについて関心を抱き、乞われて何か所かで講演を行った。

何故関心を抱くかというと、まず私が真剣を用いた実戦刀法を稽古しているということ、次に日本人固有の武士道精神が、親殺し子殺し少女誘拐が頻繁に起こる現代日本に有効なのではないか、と常々思っているという二つの理由からである。

そうしたさ中に表題の本が出たので書店で買って読んだ。

本の体裁としては、江戸時代に著作された武士道を論ずる書物を網羅し、その要点を逐次論じる。

次に、武士道を論ずることによって著者が何を言おうとしているか、また武士道

精神が日本人の考え方や生き方にどのような影響を及ぼし用立てられてきたか、
を実例を列挙しながら論ずるという体制をとっている。

潔く死ぬことだけが武士道ではない

武士道を論ずる際によく知られているのが、佐賀藩を致仕して隠居した山本常朝
が後進の藩士田代陣基(つらもと)に語って成った『葉隠』であろう。

すなわち、「武士道といふは死ぬことと見つけたり」というあの有名な文言である。

しかし著者はこの言葉が、「武士は潔く死ぬことが本分である」という側面だけが
強調され、多くの誤解を招いてきたと述べている。

その文言に続く文章で、「常時死身になりて居る時は、武道に自由を得、一生越
度(おりど)なく、家職を使果(つかいおお)すべきなり」と述べられており、
「武士道とは無意味に死を強要するものではない。武士としての一生を、いかに理
想的な形で生き抜くことができるかということの本質的な課題としていたのであ
る。」(48 頁)

と著者は解説する。

死なずに生き延びろ

「潔く死ぬ」ということでは、喧嘩や私闘で相手を死に至らしめた武士は、潔く腹を
切ることが武士道にのっとった至当な態度である、と一般に考えられがちである
が、小幡景憲編『甲陽軍鑑』を始め、大道寺友山『武道初心集』や如備子(によらい
し)『可笑記』などの武士道を論じた著書で言及されていることは、腹を切らずに逃
げ延びることこそが肝要であるというのである。

普通には討ち果たした相手側から逃げるとするのは卑怯な態度であり、武士道に悖るのではないかと思われがちであるが、喧嘩相手を討ち果たしたのは勇者であり、讃えられてしかるべきだ、とそれらの本が述べていることに著者は言及している。

「返り討ち」こそ真の勇者

面白いことに、江戸時代には、喧嘩、私闘、果し合い等で相手を斃した人物が、討手から逃れるために相手構わず大名屋敷などに保護を求めたときに、大名家ではそうした人物を匿い保護して、討手側に差しだすことを拒否することができ、またそうすることが慣習でもあったらしい。

八代将軍吉宗は法でもってそのことを正当化しようとしたほどである。

大名屋敷に駆け込まないまでも、相手を討ち果たした武士はどのような方法でもってしても生き延び、万が一敵討ちと付け狙う討手と出くわしたときには、相手を返り討ちにすることは名誉なことであり、それこそが真の勇者であるとされた、とも著者はいう。

小説などでは討手の側に正義を見出し、見事仇を討ち果たすストーリーに主眼が置かれるが、勇者は討手の側ではなく返り討ちにする側なのである。

独立国家を守り切った背景

現代の感覚と逆転しているともいうべきこうした考え方が、当時の武士道であったということは、まさに目からウロコである。

また著者は最終章で、武士道が庶民の間でも浸透し受け継がれてきたことを強調し、日本が植民地化を狙う欧米の列強から独立を守り切り、他のアジア諸国に

は見られない欧米型政治・社会制度をいち早く樹立することができたのは、武士道で培われた精神が生きていたからだと述べている。

知識層を形成する武士たちは、蘭学を通して欧米列強国がアジアの国々を砲艦外交で屈服させ、次々と植民地化してゆくのを知悉しており、国防の強化が急務であることをペリー来航の三十年も前に主張していた(水戸藩家老会沢正志齋『新論』)。

さらにまた、江戸時代から行われてきた頼母子講や為替の普及によって、欧米型の商業制度を抵抗なく受け入れる素地を有していたことによって、明治新政府による欧化政策を急激に定着させることに成功したと著者は指摘する。この指摘は重要である。

儒教の徳目の復活が急務

最後に一言述べておきたいのは、武士道が儒教精神と相反するものであることを繰り返し著者が述べていることに関してである。

四書五経に代表される儒教が理論一辺倒で上意下達を徹底したのに対し、武士道は現実に即した結果尊重の立場をとるその違いを強調している。

しかしながら、儒教倫理の仁義礼智信忠孝悌は徳川時代の身に沁みついた行動様式であり、武士道とも深く関わり合っている。

曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』はまさに、仁義礼智信忠孝悌に従って武士道を発揮する顕著な例証であり、私が主張したいのも、今は失われてしまったこれらの儒教徳目を現代に復活させ、古の古き良き日本人を再興する企てである。

封建時代の武士道でその第一とされた「忠」などの現代にそぐわない徳目も含まれているが、これらの徳目を現代風に解釈しなおし、武士道精神と連結させて実

践できるなら、領土的野心や民族・宗教の違いから紛争を引き起こし続けている
国々の範となるかもしれない。

NTT 出版(2014 年 2 月刊)¥2,800